みんなの「やりたい」から始まる
まちの政策デザインラボ
実施報告書

令和6年度
子育て世代の日常生活に関するインサイトを踏まえた
モデル施策検討事業

2025年2月28日
発行　横浜市政策経営局経営戦略課
作成　株式会社リ・パブリック

目次

1. 事業の概要
- 1.1. 本事業の背景 …… 04
- 1.2. 本事業の目的 …… 05
- 1.3. 本事業で用いた手法 …… 06
- 1.4. 本事業を通して得られた成果（要旨） …… 07

2. プログラムの設計と実施
- 2.1. プログラム設計の前提 …… 09
- 2.2. プログラムの全体像 …… 10
- 2.3. 事前研修＋招待状 …… 11
- 2.4. ワークショップ１ …… 12
- 2.5. 分析会１ …… 14
- 2.6. こども向けの動画共有 …… 16
- 2.7. ワークショップ２ …… 17
- 2.8. 分析会２ …… 19
- 2.9. 確認動画＆こどもたちとの振り返りセッション …… 21

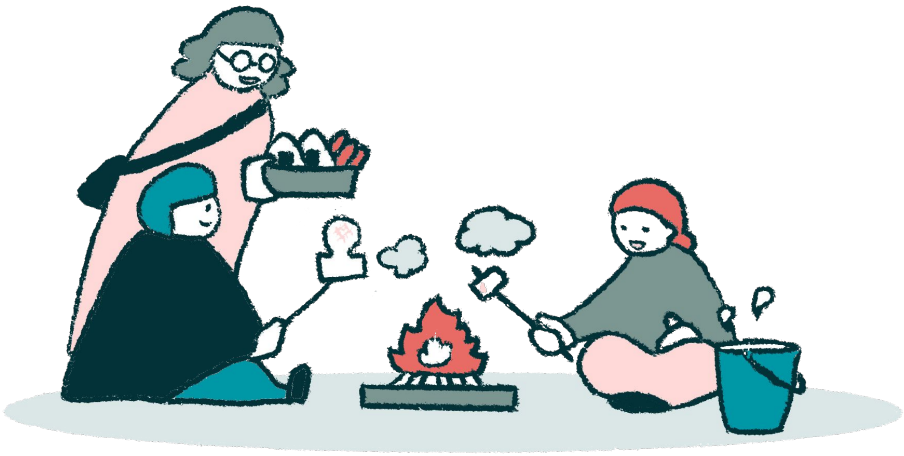
3. 政策のタネ：3つのストーリーとモデル地区での今後の取組
- 3.1. 本プログラムで導き出された、未来市民が語る３つのストーリー …… 23
- 3.2. ストーリー ① - ③ …… 24
- 3.3. 未来市民のストーリーに関連する参考事例 …… 27
- 3.4. 未来市民のストーリーに関するモデル地区での取組（試行） …… 28

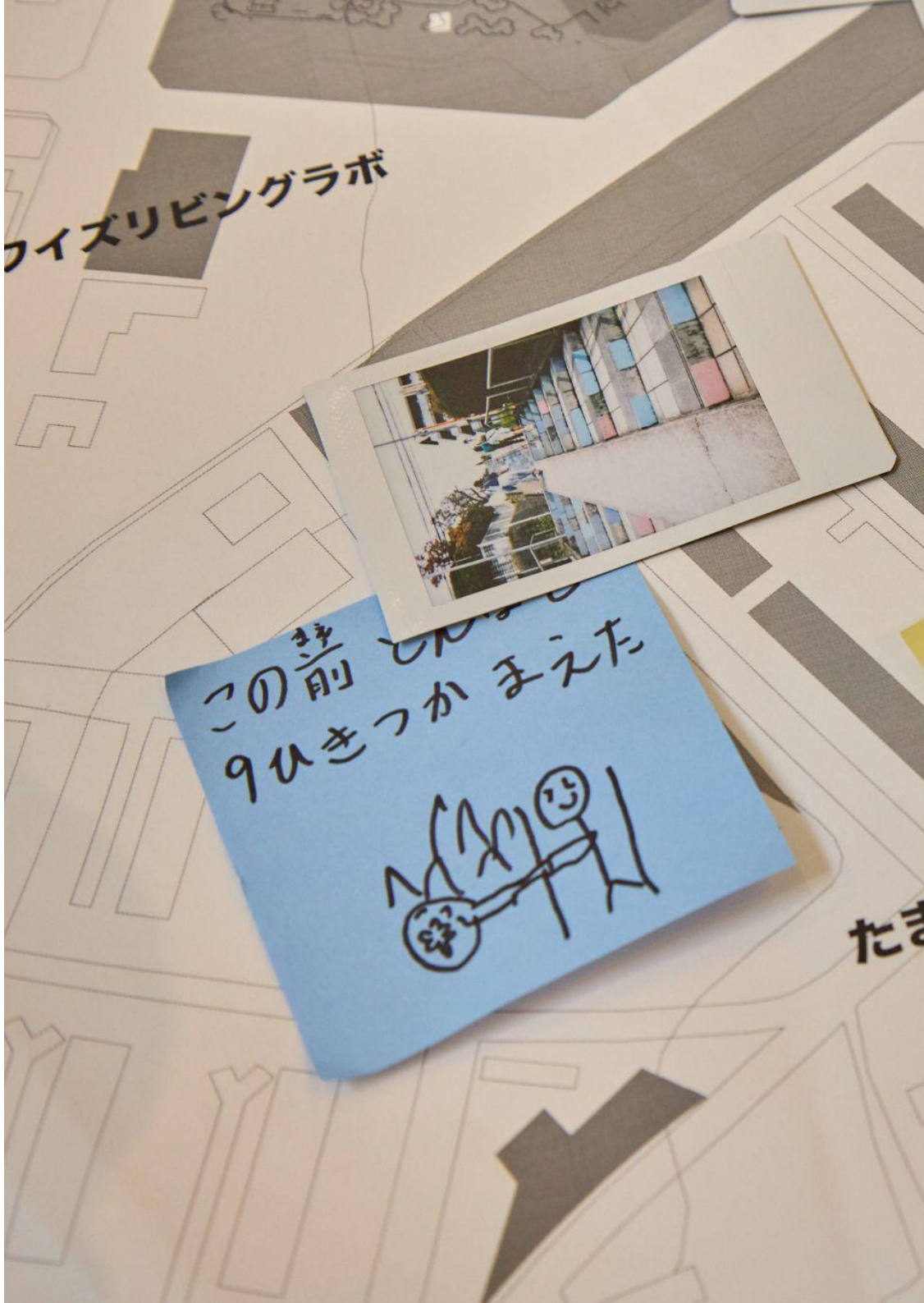
4. こどもが主体的に参加する場をつくるためのミニ実践ガイド
- 4.1. こどもが当事者として参加する政策立案の場の設計原則 …… 31
- 4.2. こどもが安心・安全に参加する場のつくり方：基本となる考え方 …… 33
- 4.3. こどもが安心・安全に参加する場のつくり方：具体的な実践方法 …… 34
- 4.4. “こんなときどうする？“ 前提となる心構えと、具体的な対応例 …… 36
- 対談 こどもも大人も、権利を尊重し合いながら地域の未来をつくるために：考え続けることの重要性 …… 37

まとめ｜本資料の活用に向けて

別冊｜参考資料及び本事業の中間制作物

1.　事業の概要





1-1. 本事業の背景
1-2. 本事業の目的
1-3. 本事業で用いた手法
1-4. 本事業を通して得られた成果（要旨）

1-1. 本事業の背景

「こどもまんなか社会」の実現に向けた動き

こども自身の人権保障を基軸として、子育てを含めこどもに関する政策が位置付けられ、広く地域社会を対象とした包括的な政策を打ち出す国際的な流れを背景に、日本でもこどもを取り巻くさまざまな課題に対し、関係省庁が横断的に解決にあたれるように、令和5年4月にこども家庭庁が発足しました。同時に施行されたこども基本法では「全てのこどもについて、その年齢及び発達の程度に応じて、その意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮されること」（基本理念第3条4号）が基本理念として掲げられるとともに、**国や地方自治体がこども施策にこども・若者などの意見を反映することが義務付けられ、「こどもまんなか社会」の実現に当事者であるこども・若者が参加することの重要性**が示されました。令和6年3月には、国や都道府県、市町村などさまざまなスケールで、こども・若者の意見を政策立案プロセスに取り入れるための具体的な留意点や事例をまとめた『こども・若者の意見の政策反映に向けたガイドライン』が発表されましたが、**現場での実践はまだ始まったばかりであり、各自治体でこどもや若者が有意義な形で政治に参加するための方法論を模索している状況**です。

横浜市では、令和４年に策定した「横浜市中期計画2022～2025」中に記載された共にめざす都市像「明日をひらく都市」及び基本戦略「子育てしたいまち次世代を共に育むまちヨコハマ」の実現に向け各種施策を展開しています。また、こども家庭庁が推進する上記の一連の動きを踏まえて、**令和６年６月には「横浜市こども・子育て基本条例」が制定され、こどもが「社会を構成する一員として、その年齢及び発達の程度に応じて、意見を表明し、多様な活動に参画することができる機会が確保されること」を市として目指す**旨が明示されました。

横浜市における令和5年度の取組「子育て世代の日常生活に関するインサイト分析調査」との接続

横浜市が令和５年度に実施した「子育て世代の日常生活に関するインサイト分析調査」では、既存の社会制度と現在の家族形態の間に発生する構造的な歪みを家庭が負担しなければならず、これが子育てに対する葛藤や難しさにつながっていることが示されました。また、今後の子育て施策の新たな方向性として、**「こどものいる生活」を楽にするための福祉的な側面が大きい従来型の子育て支援に加えて、育児者やそのほかの市民がその生活を楽しむための施策を展開することで親子や地域住民のウェルビーイングの向上につながる**可能性が示唆されました。このほか、本調査を通して下記の点が明らかになりました。

- 子育て施策を検討するにあたってしばしば論点になる**時間貧困の問題は、節約や効率化だけではなく、「空間」「仲間」「情報」といった多角的な視点で捉える**必要がある。
- こどもを家庭に迎えることによって、**育児者が自身の子育ての経験を通して培ってきた知見やノウハウをこれから育児者になる人たちに伝えたい**と思うようになるほか、**こどもを起点にして日々の生活や地域をより良くしたい**という思いが強くなる。

令和６年度実施の本事業では、前述の調査結果ならびにその過程で浮かび上がってきた９つのインサイト（別冊資料１「令和５年度子育て世代の日常生活に関するインサイト分析委託 最終報告書」pp.25-35 参照）をふまえ、上で言及した横浜市の基本戦略の重要な当事者であるこどもが主体的に議論に参加できる場を設計しました。

1-2. 本事業の目的

本事業では、「子育てしたいまち推進モデル地区」に選定された青葉区美しが丘公園周辺エリアを主な活動領域として位置付け、昨年度調査や前頁の背景を踏まえて、下記２つの目的を設定し、その遂行に向けてプログラムを設計しました。

目的１　こどもが当事者として参加する政策立案の場をデザインし、その設計原則を示す

こども基本法がうたう「年齢及び発達の程度に応じて、その意見が尊重され」ること、すなわち「多様な一人ひとりのこどもの声を聴く」ことは、シンプルですが非常に難しいことです。論理的な思考のできる大人が、言語による議論を行う従来の市民参加の政策立案プロセスとは全く異なります。**声にならない声を含めて、その声をきちんと聞きとるには、非論理的な言葉や言語以外のコミュニケーションも重要です。その手立てを考え抜き、こどもが心理的安全性を担保されて楽しく参加できる場をつくり上げ、運営する必要があります。**本事業では美しが丘公園周辺エリアをモデル地区として「こどもが政策の立案プロセスに当事者として参加できる場」をデザインし、その設計原則の素案を示すことを目指しました。

→詳細については第２章をご覧ください。

目的２　美しが丘公園周辺エリアの住民の経験と思いを反映させた政策のタネを提示する

今回の事業では、美しが丘公園周辺エリアに暮らすこどもや大人が日常生活の中で考えていること、意識的・無意識的に感じていること、あるいは本プログラムを通して観察された参加者の発話やその他の表現方法の背景にある思いを出発点にすることで、**市民から見た美しが丘の特色を大事にする**ことを目指しました。また、短期的に実装可能な具体的な政策や施策の検討にとどまらず、この地区が「子育てしたいまち推進モデル地区」に選定されていることを考慮して、**今後、美しが丘公園周辺エリアに限らず、ある程度汎用性をもってほかの地域で新規に政策や施策を立案する、あるいは既存の施策を捉え直す際に参考になる社会像や取組案**を提示することを目指しました。

→詳細については第３章をご覧ください。

1-3. 本事業で用いた手法

前述の２つの目的遂行のために設計したプログラムの中で、中心においたのは2回の市民参加型ワークショップです。

市民参加型ワークショップ

こどもから大人まで美しが丘公園周辺エリアの当事者が、この地域をよりよくするための施策を、自らの経験や思いをもとに創造的かつフラットな立場で共に考える場として2回の市民参加型ワークショップを設計し、当該地域にお住まいのこども12人（幼児6人、小学生11人）と大人10人（保護者6名、地域の関係機関4名）の参加を得て実施しました。

ワークショップには、参加者が普段の生活の中で感じていることや、改めて気づいたことを共有するためのフィールドワークや、発話以外の表現を可能にするための創作活動などを盛り込みました。

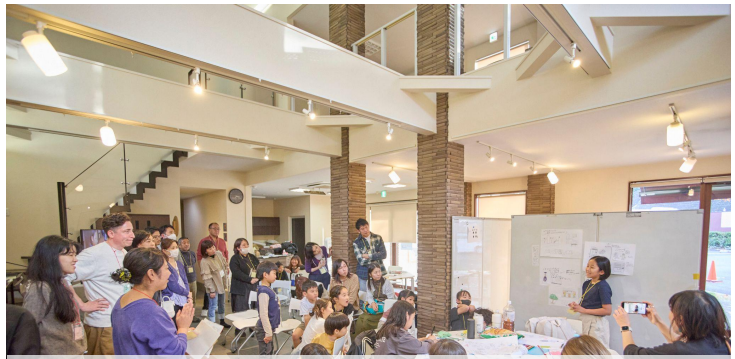
また、各ワークショップの終了後には、横浜市職員及び受託者（以下、事務局）による「分析会」を実施し、参加者から寄せられた意見や声を整理・分析し、背景にある思いやその他の洞察を抽出し、３つの語りに集約することで意味づけを行いました。

→ワークショップの行程詳細については第２章、最終的なアウトプットについては第３章をご覧ください。

WS1のフィールドワーク。美しが丘公園を和気あいあいと歩きながら、普段感じている思いを共有し合う

WS1のフィールドワーク。幼児・小学生は感情や行動シールも使いながら普段の思いを表現

WS2では「大人もこどもも自分のペースでやりたいことをできる街」について考え、その実現のための場や仕掛けを検討した



WS2の発表タイム。チームの発表に、自分の気づきや思いを補足するこども参加者

1-4. 本事業を通して得られた成果（要旨）

目的１）こどもが当事者として参加する政策立案の場をデザインし、その設計原則を示す

本事業では、こどもが政策共創の主体となるプログラムを設計・実施しました。その過程で得られた、現場での細やかな工夫から設計の根幹となる考え方まで、多岐にわたる気づきや学びを整理し、『こどもが主体的に参加する場をつくるためのミニ実践ガイド』（第４章 pp.30～37）としてまとめました。本ガイドでは、**「こどもが当事者として参加する政策立案の場の設計原則」**（右図）を提示した上で、こどもが安心・安全に参加できる場をつくる際に基盤となる**セーフガーディングの概念**と事業活動中に発生し得る**具体的な事例**を紹介します。また、本事業での実践を通じて、地域社会でこどもたちと協働の場を創出する際は、常にそれぞれの状況や既存の関係性を考慮する必要性が明確になりました。本ガイドはそうした場の運営者として求められる心構えについても触れます。今後、横浜市やその他の地域で類似の取組がなされる際のヒントになれば幸いです。

こどもが当事者として参加する政策立案の場の設計原則 → p. 31

1. **独立した人格と尊厳を持った権利主体として、こども一人ひとりと向き合う**
2. **こどもの意見を大人の価値基準で一方的に解釈しない**
3. **場の権威勾配を緩和する手立てを複層的に講じる**
4. **全ての意思決定に「大人の都合」が入り込む可能性があることを意識する**
5. **言語によらない表現方法を可能にする**

目的２）美しが丘公園周辺エリアの住民の経験と思いを反映させた政策のタネを提示する

利便性だけでなく、信頼関係が場やサービスの効果的な提供の鍵

R5年度の子育てインサイト調査では、福祉的な側面が大きい従来型の子育て支援から「こどものいる生活」支援への再定位が行われ、「子育てが楽になり、『こどものいる生活』が楽しくなるための施策とは?」という新たな視点が提示されました。今回の事業では、**こどもと大人の双方から「信頼」あるいはそれに類する言葉（「知らない人はいや」「知っている人だったらいいよ」など）が多く聞かれ、「楽（≒便利）」と「楽しい」とは別の軸で「信頼」がサービスや場の効果的な提供において重要な役割を果たす可能性**が示唆されました。

成果物｜未来市民が語る３つのストーリー

今回の事業を通して、市民から寄せられた意見や考え、あるいはその背景にある思いをもとに、理想の「こどものいる暮らし」像について発想を膨らませながら、その社会像における政策や施策のありようについて検討を進めました。その内容を、短期的には実現が難しいものも含め、未来市民による３つのストーリーとして表現しました。

① **こどもも大人も自分らしく、自由にのびのび過ごせる時間** → p. 24
② **地域の人たちのアイデアと手で育てていける公園** → p. 25
③ **信頼できる人たちと、もっと気軽につながれるネットワーク** → p. 26

2. プログラムの設計と実施

2-1. プログラム設計の前提
2-2. プログラムの全体像
2-3. 事前研修＋招待状
2-4. ワークショップ１
2-5. 分析会１
2-6. こども向けの動画共有
2-7. ワークショップ２
2-8. 分析会２
2-9. 確認動画＆こどもたちとの振り返りセッション

2-1. プログラム設計の前提

こどもも大人も、当事者としてのより本質的な参加を促す

本事業では、こどもから大人まで年齢に関係なく、当事者性が尊重される形で政策立案プロセスに参加できるプログラム設計を心がけました。困りごとの単なるヒアリングのような参加度合いが低い形式（右図でいう「当事者への聴取」）にとどまらず、共創・協働の度合いを高めるプログラムを目指しました。

本プログラムでは、ワークショップ参加者が「2. 政策作成」の共創主体として参加できるように設計しました。また、目の前の課題のみならず、日々の生活で参加者が感じ、考えていることや、さらには「好き／嫌だ」といった感情など、潜在的・内発的な要素を丁寧に引き出すワークを行い、政策立案の出発点である「1. 政策課題の形成」にも市民が寄与できる仕組みを目指しました。

全ての段階においてこどもの権利を守る

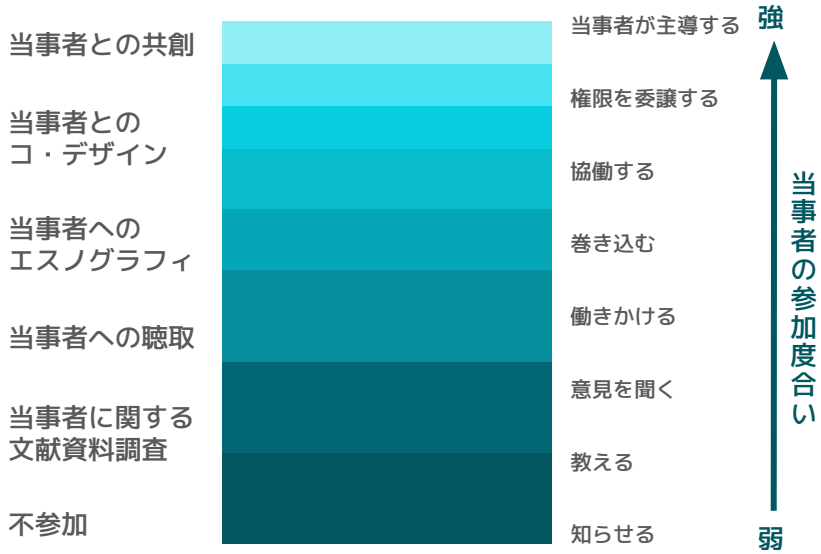
「こども・若者の意見の政策反映に向けたガイドライン」にある意見反映プロセスを参考に、「大人のマインドセットを整える」「意見を聴く対象を決めつけない」「こどもの安心安全を確保」など、プログラムの全ての段階でこどもの意見を適切に扱えるように、こどもの権利に関する専門家・一般社団法人Everybeingの助言をふまえて設計しました。詳細については次頁以降をご覧ください。

参加者の構成

本事業の参加者は美しが丘在住のこどもと大人、そして市または区の関連施設の職員、合わせて27名で構成。参加者のリクルーティングは子育て支援者のご協力を得て行いました。属性による内訳は下記のとおりです。

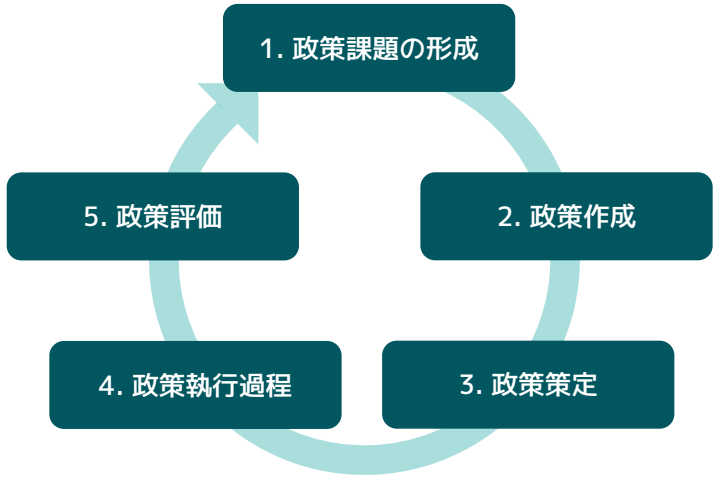
こども17名｜幼児（5,6歳）：6名、小学生低学年：5名、小学生中学年〜高学年：6名
大人10名｜保護者：6名、市または区の関連施設の職員：4名

参加型政策デザインのハシゴ



Gov. UK, “Lab Long Read: Human-centred policy? Blending ‘big data’ and ‘thick data’ in national policy”をもとに翻訳・作成

政策サイクルの５つの段階



Jann and Wegrich（2007）などを参考に提案者作成

2-2. プログラムの全体像

プログラムは、9月中旬の大人向け事前研修およびこども向け招待状の送付から、9月28日のワークショップ１、分析会1、11月10日のワークショップ２、分析会２を経て、1月23日～24日の経過報告動画の視聴とオンラインセッションに至るおよそ4ヶ月にわたって実施しました。

事前研修

招待状

事業の目的やワークショップ参加の心構えについて、大人とこどもそれぞれにお伝えしました
▶ P11

ワークショップ１

こどもと大人の参加者が、理想の街や暮らしについて一緒に考えました
▶ P12

分析会1

参加者の発言の背景の深掘り、重要な視点のとりまとめを行いました
▶ P14

こども向け動画
▶ P16

大人向け資料 ▶ P42

ワークショップ１のまとめと分析会1の経過について、こどもと大人、それぞれにお伝えしました

ワークショップ２

大人もこどもも自分のペースで過ごせる「理想の街」をつくるためのアイデアを考えました
▶ P17

分析会2

ワークショップ2での参加者の発言やアイデアを考察し、取組案を検討しました
▶ P19

まとめ

経過報告動画・こどもたちとの振り返りセッション

参加者の意見をもとにまとめた未来の街の姿と取組案をこどもたちに伝え、フィードバックをもらいました
▶ P21

報告書作成

目的①に対するアウトプット

こどもが主体的に参加する場をつくるためのミニ実践ガイド ▶ pp.30-37

目的②に対するアウトプット

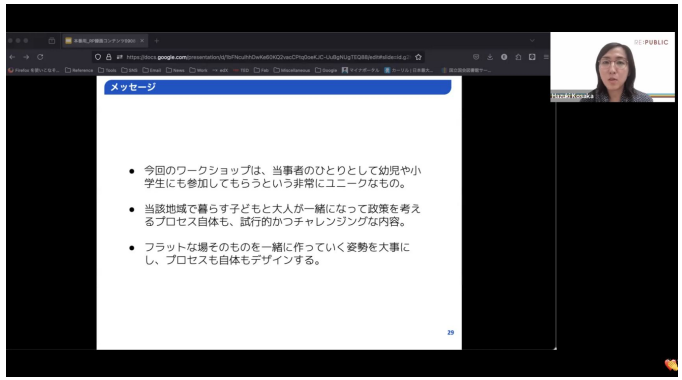
未来市民が語る３つのストーリー、ならびにそれらのストーリーに関連するモデル地区での取組（試行） ▶ pp.23-29

- こどもの参加者向け
- 大人の参加者向け
- こども・大人の参加者向け
- 横浜市・事務局の作業

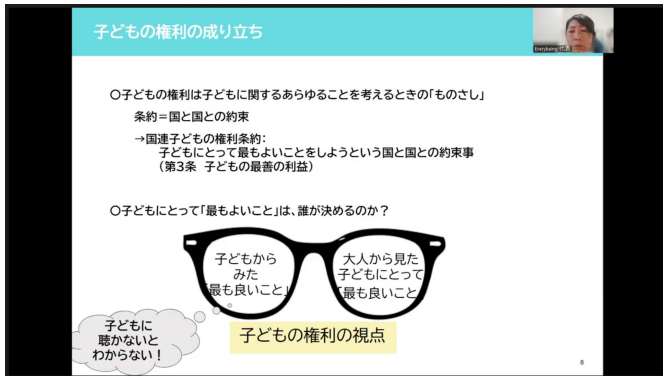
2-3. 事前研修＋招待状

事前研修

ワークショップに参加する大人向けに、プログラム全体の趣旨説明、及びこどもの権利に関する**ミニレクチャー動画を試聴**していただきました。そのうえで、**質疑応答や顔合わせ、目線合わせを兼ねた事前研修をオンラインで実施。**こどもの権利をめぐる近年の動向、こどもに対する振る舞いなどを事例を交えてディスカッションし、こどもと大人が共に政策立案を行う挑戦に向けて目線を合わせ、コミュニティを温める機会となりました。



ワークショップ当日に、目線が合った状態で参加していただくために、目的を事前に共有



こどもの権利条約については専門家によるレクチャーを動画で配布（協力：一般社団法人Everybeing）

招待状

こどもに向けては、ワークショップでやることや持ち物を書いた招待状を準備し、保護者を通じて事前に渡してもらいました。**「ひとりの個人として大人と同等に扱います」「こどもへの説明を惜しまず、わかりやすい形で情報を共有します」というメッセージも込められています。**招待状の中には、ワークショップの場がどのようなものであるのか、何を大切にしたいのかをイラストとともに書き込みました。こどもが内容を理解でき、かつ楽しい気分でワークショップに参加できるように色使いなども工夫して制作しました。

こどもたちに送った招待状

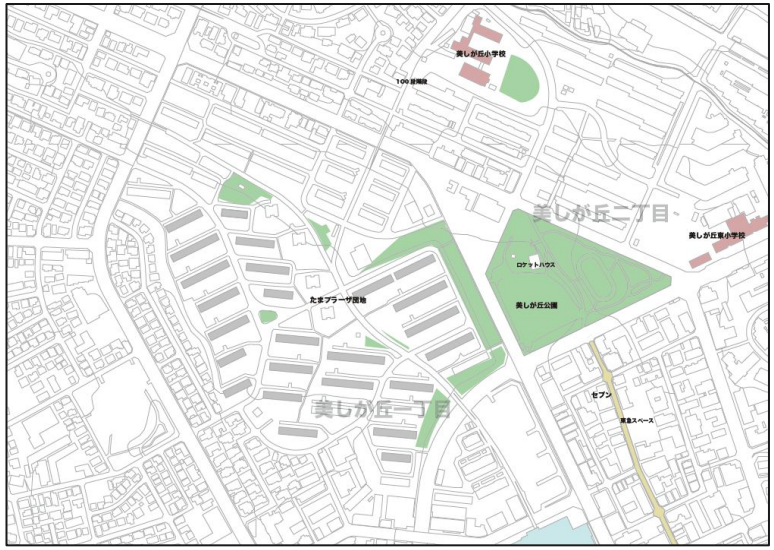
2-4.ワークショップ1

目的

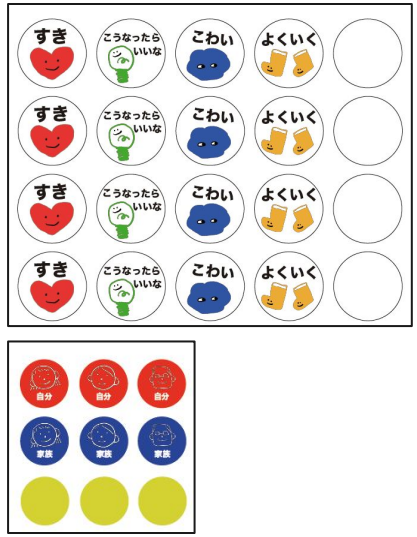
こどもと大人の参加者が、自分の暮らすまちについてどのような思いを抱いているのか、また、普段の暮らしがどのようであったら良いと思っているのかを、理由とともに浮かび上がらせること。

手法

幼児・小学生・大人に分かれて、グループごとに地図を持って公園とまちを歩きながら発見する「フィールドワーク」と、自分の理想の暮らしについて思いを巡らせる「妄想タイム」の２部構成。最後に全体で意見を共有しました。



ツール１：まちあるき用の地図。大人には一人一枚配布。こどもチームの場合は、ファシリテーターが拡大地図を首にかけ、こどもたちがシールを貼れるようにした（地理院タイルを加工してリ・パブリック作成）



ツール２：気持ちを表現する手助けとなるシール

設計のポイント

1 チームづくりとゾーニング

こどもと大人を別のチームにし、こどもの視界になるべく大人が入らないように部屋を分けたり、仕切りを設置したりすることで、無意識のうちにこどもにかかる圧を軽減すべく場を設計しました。

2 ファシリテーション

ファシリテーターの誘導のもと、こどもも大人も自由に思いを表明できる時間になるよう心がけました。特に大人には、何かの意見が出た時に、「なぜそう思う？」という質問を繰り返し、背景にある思いや経験、葛藤などを無理のない範囲で共有してもらいました。

3 タイムマネジメント

こどもの集中力を考慮し、こどもが参加する時間が2時間を超えないよう設計。開始時間を、大人、小学生、幼児でずらすことで対応しました。

4 おやつと休憩のマネジメント

こどもがリラックスして参加できるように、食べ慣れたおやつの持参を促し、さらにアレルギーの少ないおやつを複数用意しました。

ワークショップ１のハイライト

美しが丘公園及び周辺を歩きながら、普段感じている思いを共有し合う「フィールドワーク」。小学生は5〜6人ずつ２チームに分かれ、それぞれにファシリテーターや記録係がついて、会話を細やかに拾っていった

ファシリテーターが持つ拡大地図に、シールをぺたぺた貼っていく幼児参加者

発見したこと、感じたこと、やりたいことを絵を描きながら表現する、幼児チームの「妄想タイム」

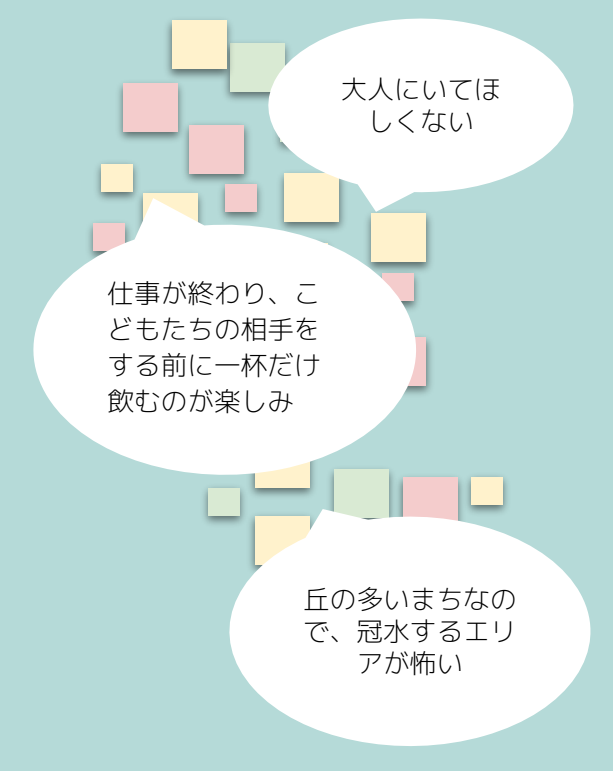
小学生チームはぬいぐるみに「代弁」させる形で発表。自分ではない存在に語らせることで、スムーズに意見を言えた子もいた

2-5. 分析会１（前半）

ワークショップで市民から聞こえてきた声を、横浜市の職員が中心となって分析・検討するセッションを行いました。全ての付箋やメモに目を通し、こどもの様子なども想起しつつ、なるべく加工せずにグルーピング。R5年度「子育てインサイト調査」で抽出された９つのインサイト（別冊資料１参照）及び、昨今の地域事情なども考慮しながら発言の背景を深掘りしたうえで、19のトピックとしてまとめました。以下ではプロセスの一例を示しています。（意見・発言・トピックの詳細は別冊資料２参照）

1）　意見をまとめる

こどもチーム、大人チームの意見の全てを取り上げ、近い意見をグルーピングする作業を行いました。



2）発言の背景を深掘りする

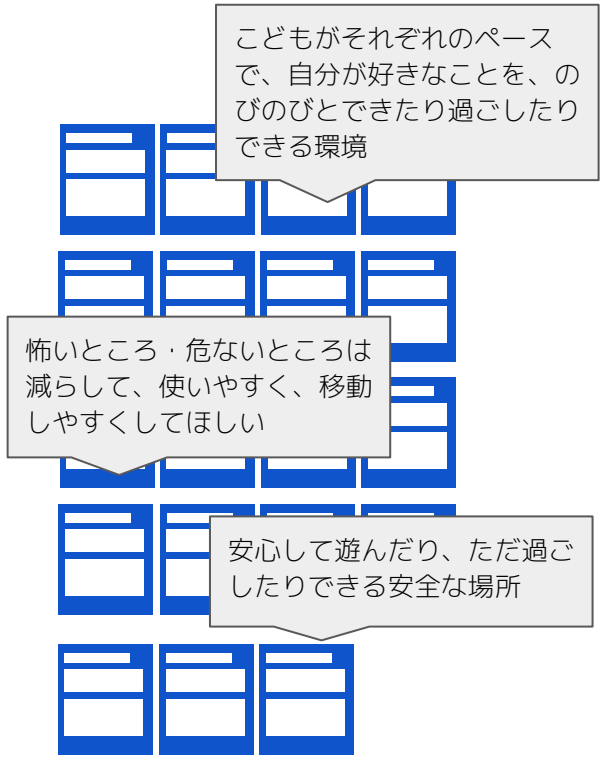
参加者の発言の背後にある願望や課題を、市民を取り巻く状況と合わせて考察しました。

- 大人にいてほしくない→こどもだけの秘密の聖域がほしい 、大人の価値観で制限されたくない
- 虫をとりたい、おばけに会いたい→日常のなかでわくわくする／スリルがあるようなまちであって欲しい
- 決められたことをやるより、あるものを使って自分たちでつくりながら遊びたい
- 小さい子に気を遣う／大きい子が怖い／子連れでいける場所がない→自分たちらしくのびのびと過ごしたい
- 分刻みの日常から離れてゆっくりしたい
- 有事のときにも安心できる街であってほしい

・・・などなど

3）トピックにまとめる

参加者からの生の発言とその背景をあわせて考察し、近い話題をトピックとしてまとめました。



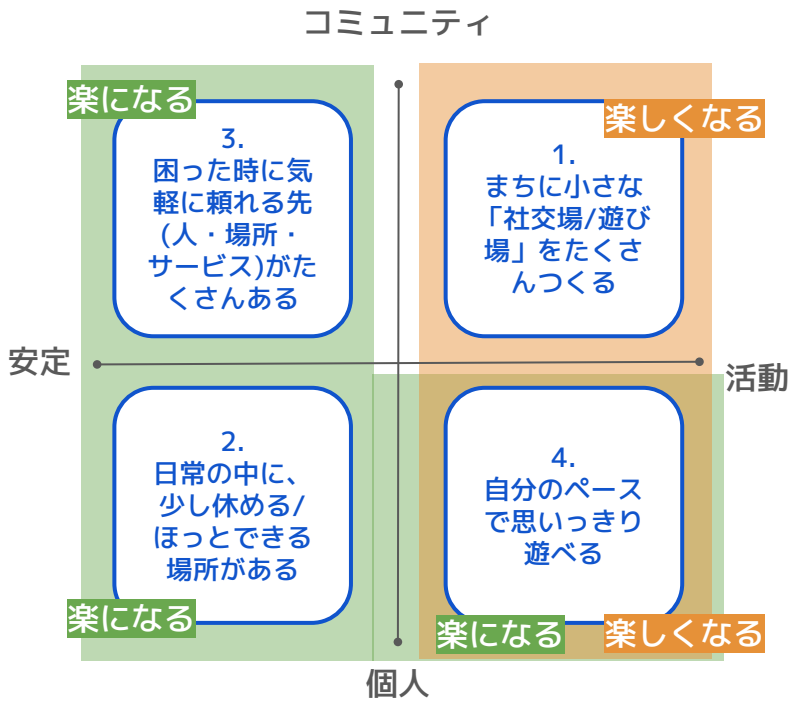
2-5. 分析会１（後半）

ワークショップ２に向けて、議論の発展性や大人とこども、双方への関連性、公園の内外に落とし込める可能性などを考慮しながら、19の「トピック」を、議論しやすい大きさの６つの「テーマ」に分類。そのうち下記の４テーマに注目しました。（インフラに関する２つのテーマは、市民の声として横浜市に伝え、ワークショップでの議論対象からは除外しました）

４）４つのテーマの関係性を読み解く

２軸で整理

横軸に個人の健やかな生活に不可欠な「安定」と「活動」、縦軸には「個人」と「コミュニティ」を置き、４つのテーマを整理しました（右図）。4つの象限は対立するようにも見えますが、各テーマは地続きで、場合によっては補完し合う関係性にあります。例えばテーマ１の「社交場」、つまり人々が適度な距離でつながっている場が、有事の際にはテーマ３に関連する共助のネットワークとして機能する可能性が考えられます。



施策の「効きどころ」の観点から、さらに整理

上述のように整理した４テーマを実装につながる施策の観点から整理すると、図の左側のテーマ３及び２はいずれも子育てが「楽になる」ための施策であり、右側のテーマ１及び４は「楽しくなる」ための施策と言えます。R5年度「子育てインサイト調査」で浮かび上がった「こどものいる生活が楽になるだけでなく、楽しくなるための施策とは？」という問いへの答えを市民と共に探すのであれば、テーマ４を深掘りするのが適当と結論づけました。

５）ワークショップ２で探索するテーマを決める

ワークショップ2ではテーマ４を入口としますが、「自分のペース」を守るためには自分以外の人や仕組み、場所が必要です。また、「子育てをしているのであれば親がこどもにあわせて当たり前」、あるいは「こどもなら親の言うことにしたがって当然」というような旧来の社会通念に無意識に囚われている場合もあります。そこでワークショップ２では、大人もこどもも自分のペースを大切にできていない状況を、具体的に思い浮かべるところからスタートし、別の象限に置かれたテーマと行き来しながら考えを膨らませ、理想の暮らしを思い描いてもらうことにしました。

2-6. こども向けの動画共有

目的

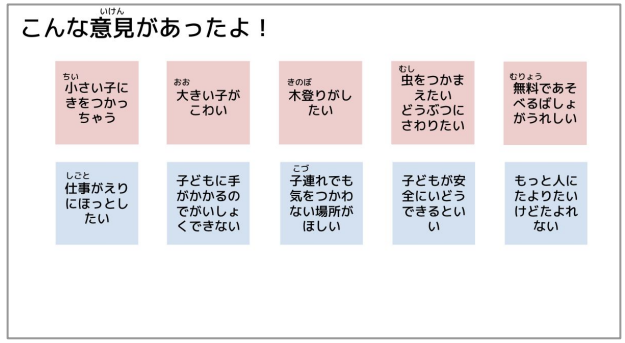
ワークショップ１で行ったことを思い出してもらうため。また、ワークショップ後に横浜市職員や事務局メンバーが解釈した内容が、こどもにとって違和感のないものであるかを確認するため。

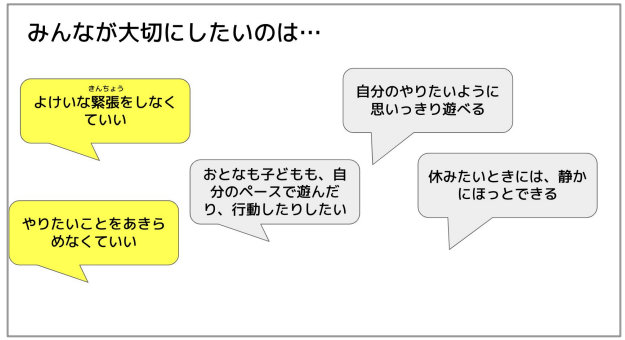
手法

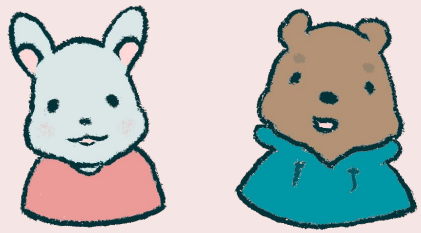
こどもが理解しやすいように、ワークショップ１を見ていた「うさぎ」と「くま」のキャラクターが対話形式で振り返るというストーリーに仕立てました。6分の動画にまとめ、ワークショップ２の数日前に共有。保護者の協力を得て、こどもに試聴してもらいました。

ポイント

- 漢字にはふりがなをつける
- 写真をたくさん入れて、当日の様子を思い出しやすいようにする
- ストーリーをシンプルにする
- Web会議システムのアバター機能を活用し、親しみやすいキャラクター（うさぎとくま）を登場させる







キャラクター　うさぎ ・くま

こどもたちへの案内役。ワークショップ１でこどもの「代弁」を務めたホワイトタイガーのぬいぐるみ（p.13）の友人という設定

う：1回目のワークショップでは、みんなで地図とシールもって、公園の中で遊んだり商店街をあるいたりしたよね

く：「すき」「よくいく」「こわい」っていうシールを、どんどん重ねていったんだよね～。こどものみんなは最後、公園で遊んでて、とっても楽しそうだったなぁ。うらやましいなぁ

※ 動画用のスクリプトから引用

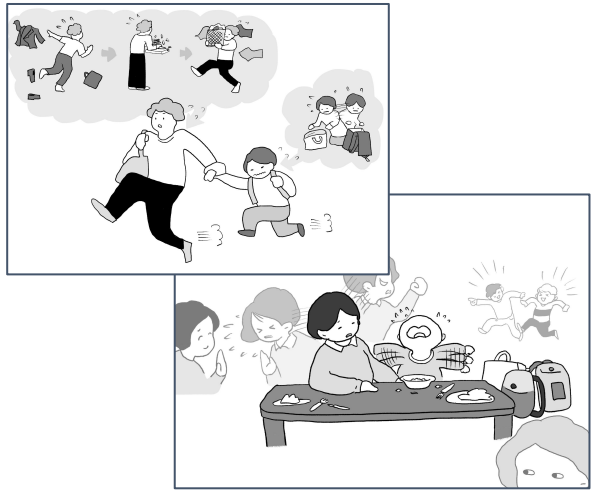
2-7. ワークショップ２

目的

「大人もこどもも自分のペースでやりたいことをできる街」について考え、その実現のための場や仕掛けを検討すること。

手法

幼児・小学生・大人に分かれ、グループごとに、まずは「自分のペースでできてない」と思う状況や経験を共有。その状況を変えるために効果がありそうなアイデアを考えました。大人はさらに、複数の状況とアイデアを繋げて、日常のストーリーとしてまとめ、スキット（寸劇）形式で共有しました。



ツール１：大人には、日常が思い出しやすいように、夕方の慌ただしい時間や、外食での心労を描いたシーンカードを用意した

ツール２：気持ちを表現する手助けとなるシール

設計のポイント

1 発表形式の工夫

大人チームの発表：こどもにわかりやすく伝えるため、**３分のスキット（寸劇）形式で発表。**役になりきって演じる過程で大人も楽しめて、こどもたちも飽きずに鑑賞できました。大人が作ったたストーリーに対して「この人が怖い人だったらどうするの？」とか「大学生と遊んであげてもいいよ」など、自由に発言しつつ、こどもたちも楽しむことができていたようです。一方、こどもたちには、緊張や不安を感じずのびのびと意見を語ってもらうため、大勢の大人を前に発表させる形式ではなく、小学生チームはワークショップ中にファシリテーターが質問しながら動画を撮影。全体共有ではその動画を流しました。

2 粘土や工作を介したコミュニケーション

こどもは言語以外の多様な表現を用いた方が、自由に思いや考えを表現しやすいこともあるため、粘土やクレヨン、折り紙やペンを用意し、手を動かしながら自分の「やりたいこと」を形にできるようにしました。そのプロセスにはつねに大人が寄り添い、会話をしながら、こどもの思いを引き出しました。

3 こどものつぶやきを拾えるような大人の人員配置

独り言のように思ったことを口にする子も多いため、小さな発言も拾えるように、大人がこどもたちの間に入り込み、作業や発表の時間を過ごすように設計しました。

ワークショップ２のハイライト

幼児チームは紙粘土を使いながら、「こんな街がいい」「こんなのがあったら楽しい」と教えてくれた

小学生チームは、折り紙をおったり絵を描いたりしながら、アイデアを膨らませていった

小学生チームはファシリテーターがインタビューしながら動画撮影。大勢の前で発表するよりも、自分の気持ちを素直に表現しやすかった様子

大人チームの発表はスキット（寸劇）形式。こどもたちに伝わるように体を張って熱演した。こどもを意識することで大人の振る舞いが変わった

2-8. 分析会2（前半）

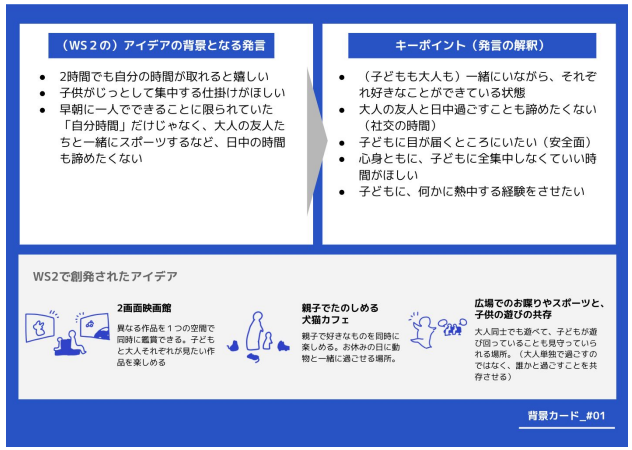
ワークショップ２で参加者から出された意見やアイデアをまとめるとともに、発言の背景を解釈しながら、類似する背景や課題をグルーピングしました。その上で今回、重点的に掘り下げるべきテーマを考えました。

1）　市民発のアイデアをまとめる

市民から出てきたアイデアを整理しました。

2）発言の背景と合わせて分類する

参加者の発言の背後にある願望や課題のポイントを解釈し、関連するアイデアと紐づけて「背景カード」を１０枚作成しました。【別冊資料3】



3）重点テーマを３つ決める

参加者の思いを起点に、取組のアイデアを膨らませるための３つの重点テーマを決めました。

① 創造/想像する余白(playful)がある場所・仕組み

② 異なるテンポをもつ人が共にいる場所・仕組み

③こどもも保護者も安心して手が離せる場所・仕組み

2-8. 分析会2（後半）

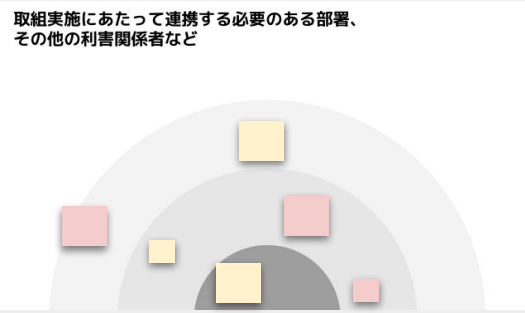
横浜市の多様な部署からの職員13名、こどもの権利に関する専門家3名、運営事務局メンバー6名が集まり、３つの重点テーマ（①創造/想像する余白（playful）がある場所・仕組み、②異なるテンポをもつ人が共にいる場所・仕組み、③こどもも保護者も安心して手が離せる場所・仕組み）を掘り下げ、取組のアイデアを発想する機会を設けました。

４）テーマに合う取組案を、部署横断の視点で考える

十分な予算を確保し、取組のインパクト及び効果を高めるには、子育て領域にとどまらない視点の拡張が必要です。特定の課題への解決策ではなく、課題に対応しつつもできるだけ多くの成果を出し、幅広い領域に好影響を及ぼすことを目指し、領域横断的な体制で取組を検討しました。

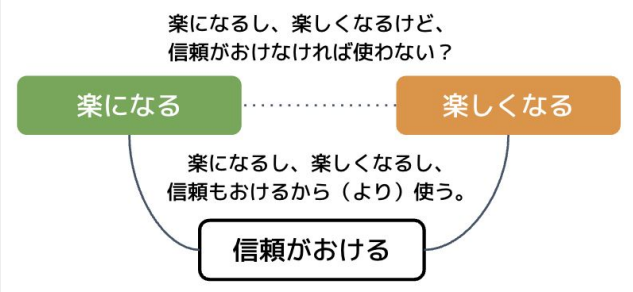
発想のポイント①

課題やアイデアをさまざまな角度から捉え直し（リフレーミング）、どんな人が関わってきそうか、どんな既存施策と接続しそうか、どのような成果・効果が期待できそうかをあわせて考えます。



発想のポイント②

2回のワークショップを通じて、こどもと大人の双方から「信頼」というキーワードが浮かび上がってきました。そのほか、こどもからは特に「楽しい」ことが重要だと改めて示されました。取組を検討する際には、１）その取組は楽しいのか、２）その取組は信頼がおけるのか（あるいは新しい信頼の構築につながるのか）という視点も常に持ち合わせることが重要です。



５）未来のストーリーを編む

新たな取組が実装された後の地域では、どんなことが起こり、住民がどのような思いで暮らしているのか、３つのストーリーとして表現しました。

2-9. 確認動画＆こどもたちとの振り返りセッション

目的

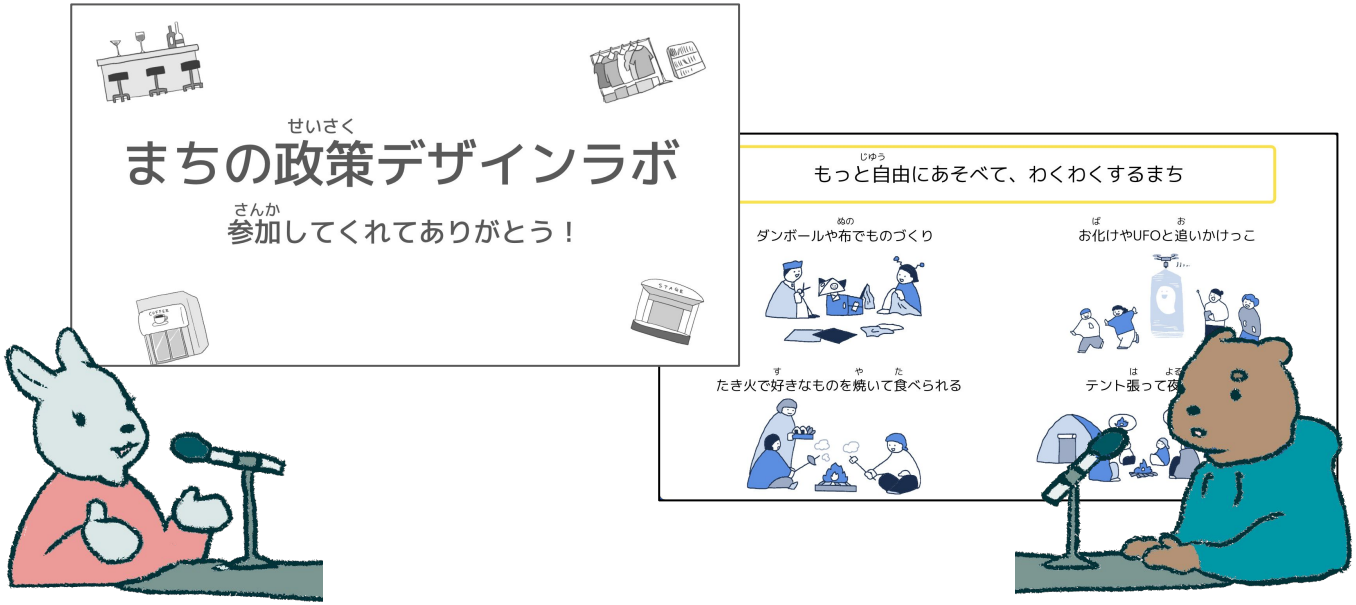
横浜市の職員及び事務局メンバーがワークショップ後に検討したアイデアや取組案を伝え、こどもたちにとって違和感がないかどうか確認すること。ワークショップを振り返り、フィードバックをもらうこと。

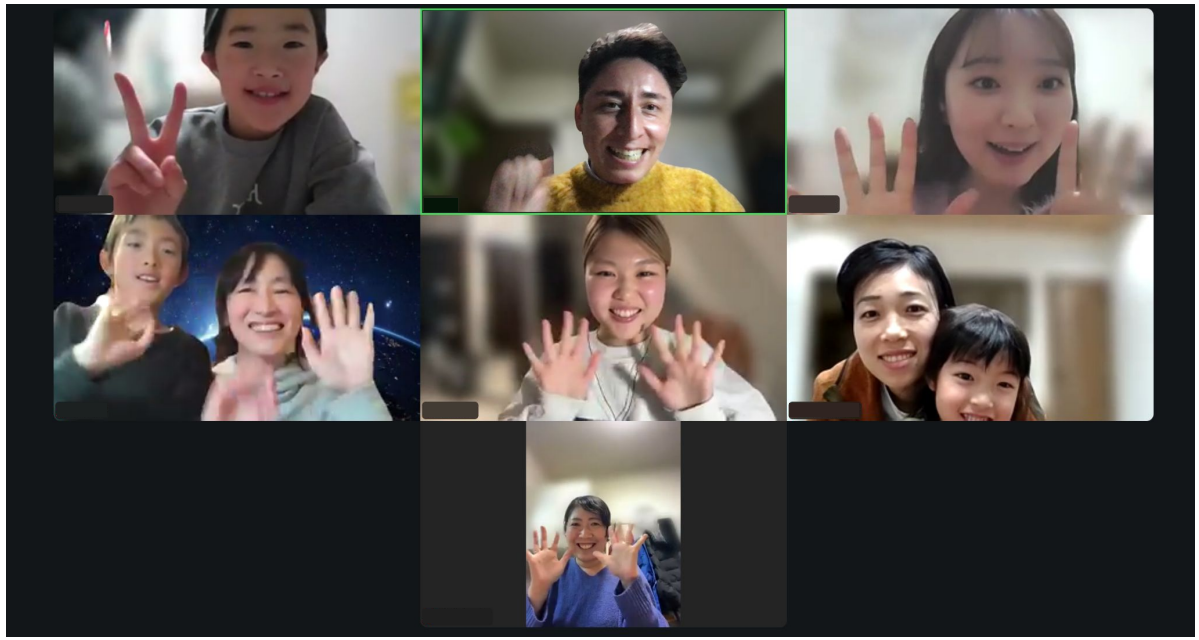
手法

ワークショップ参加者の意見をもとに事務局と横浜市が検討した取組案を、うさぎとくまの掛け合いによって紹介する動画（6分程度）を制作。30分のオンラインによる小グループセッションの中で一緒に動画を見た後に、こどもたちからフィードバックをもらいました。

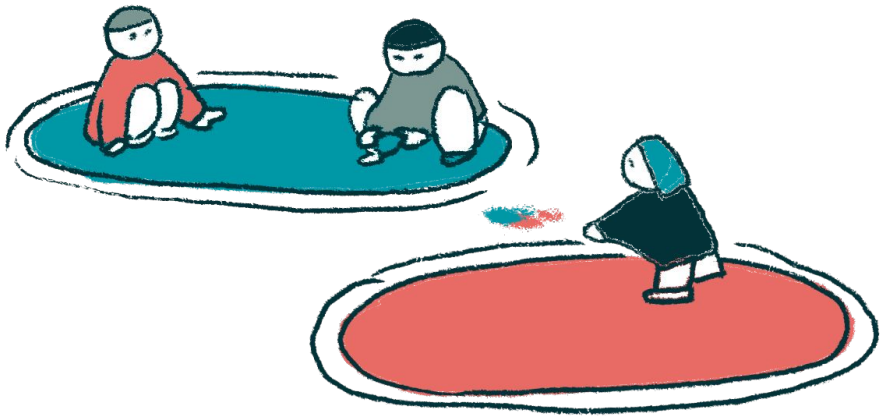
ポイント

- 動画を制作する際に、事務局側の価値判断をなるべく入れないようにする。
- 本セッションは、こどもの権利に関する専門家である Everybeing のメンバーの立ち合いのもとで実施。
- 双方の利便性を鑑みオンラインで実施

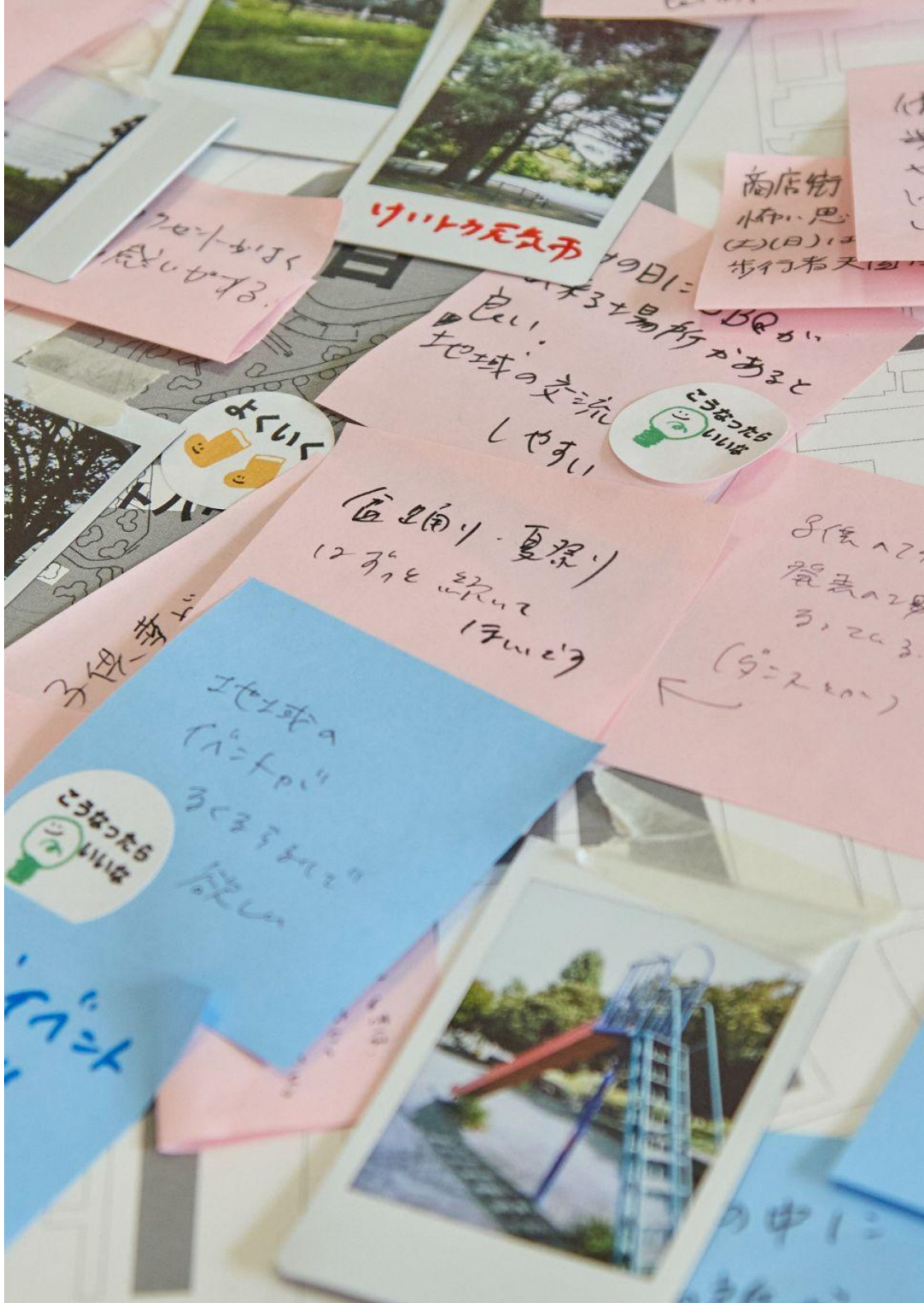




3. 政策のタネ：
3つのストーリーと
モデル地区での今後の取組



3-1. 本プログラムで導き出された、未来市民が語る３つのストーリー
3-2. ストーリー ① - ③
3-3. 未来市民のストーリーに関連する参考事例
3-4. 未来市民のストーリーに関するモデル地区での取組（試行）



3-1. 本プログラムで導き出された、未来市民が語る３つのストーリー

本事業の第2の目的は「美しが丘公園周辺エリアの住民の経験と思いを反映させた政策のタネを提示する」こと。２つのワークショップで表出したこどもと大人の考えや気づき、思いを2回の分析会で丁寧に整理し、それらを再編集して３つの「未来市民のストーリー」を描きました。現時点の市民の思いやアイデアが、ここには散りばめられています。これらのアイデアや取組は今すぐ実現するものではありませんが、実装されたとしたら、どんな暮らしが将来、実現しているでしょうか？ 未来市民の声に耳を傾けてみましょう。

未来市民のストーリー①

こどもも大人も自分らしく、自由にのびのび過ごせる時間

遊びや焚き火を使った共食を通じて地域のつながりを深めるイベントに関するストーリー。主に、身近な遊びや楽しみ、自由と自主性を求めるこどもの声と、こどもと一緒に過ごしながら、それぞれのテンポで好きなことができる状態を求める大人の声を反映。

語り手｜まいかさん
10歳・小学校5年生
両親と5歳の双子の弟と共に区内のマンションに住む

未来市民のストーリー②

地域の人たちのアイデアと手で育てていける公園

公園の自治に、多様な市民がそれぞれのペースや役割で関わることができる仕組みを描いたストーリー。主に、身近に緑や自然と触れ合える環境を求めるこども・大人双方の声や、時間的拘束なくこどもに多様な経験をさせたい大人の声を反映。

語り手｜稔さん
68歳・元ITエンジニア
3年前に退職し、これからは地域貢献したい。こどもは独立し、妻と犬と暮らす

未来市民のストーリー③

信頼できる人たちと、もっと気軽につながれるネットワーク

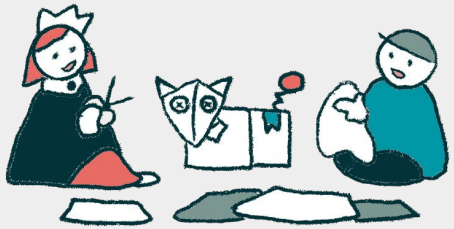
顔が見えて、気軽に頼れる信頼関係を前提とした地域サービスのあり方の一例を描いたストーリー。こども・子育てに関わるサービスを利用する際にサービス提供者側に対する信頼の醸成が重要だという、こども・大人双方から寄せられた声を反映。

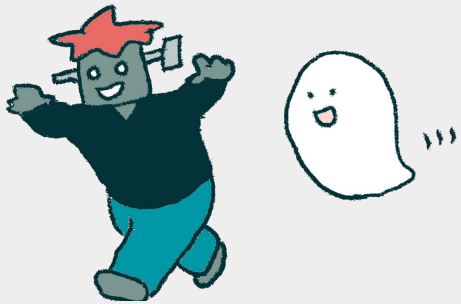
語り手｜美咲さん
42歳・金融機関勤務
フルタイム勤務。自営業の夫、小学3年の長男、3歳の長女の4人家族

3-2. ストーリー① こどもも大人も自分らしく、自由にのびのび過ごせる時間

語り手｜まいかさん
10歳・小学4年生

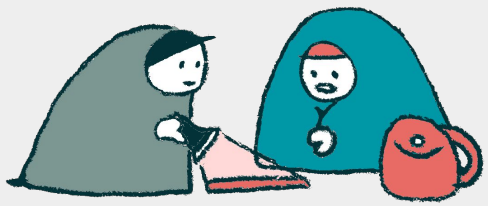
今週の土曜日は「わくわくナイトストリート」！
夕方の４時頃から、公園の隣の道が歩行者天国になるので、道路に蛍光チョークで絵を描いたり、近所のお店が集めてくれたダンボールとか布とか、いろんな素材を使って工作したりします。こども向けのスペースで、大人が考えたやり方で遊ぶより、**自分たちで自由に想像して、遊び方を決められる方が楽しいし、そんな場所や時間がもっとほしいな。**「わくわくナイトストリート」は、私にとってそんな場所です。





暗くなってきたら、焚き火の時間！ 近所のおじさんたちが公園の落ち葉などで火をおこしてくれます。いつもは帰る時間だけど、大人も公園に集まってきます。おにぎりやマシュマロを串に刺したのがドローンで届いて、焼いて食べるのが楽しみ。うちには5歳の双子の弟がいて、レストランにはなかなか行けないけど、この日はいくら騒いでも怒られません。大学生たちが特別な機械を使って、**空にゾンビやおばけ、UFOを映してくれると、小さい子たちは「キャー」って追いかけて大盛り上がり。**道に小さなお店が出て、大人はワインを飲んだりして、ゆっくりおしゃべりしています。準備や片付けもみんなで。

わくわくナイトストリートは、**実は防災訓練にもなる**んです！地震で停電や水が出なくなったら、ここで集まったり、焚き火したりするのかな。**遊びながら仲良くなったら、助け合う練習にもなる**って、いいことですよね。「夜の避難所体験」というアイデアもあります。公園にテントを張って、夜に避難するとしたら何が大変か、やってみて話し合うんです。こどもの意見も大切だから、まいかちゃんたち小学生も絶対参加してね！って、みんなに言われています。



ポイント

自分たちで想像／創造を広げて遊べる場

忙しいスケジュールの合間に、限られた場所で、小さく遊びがちな現代のこどもたち。時にはダイナミックに時間や素材を使って、何かに没頭する時間や場所を持てたら、知らない自分に出会えるかも。

日常で「わくわく」に出会える、それぞれのペースで楽しめる

おばけに会いたい、虫をとりたい。小さなこどもたちからはそんな声もたくさん聞かれました。遊園地やキャンプに出かけなくても、いつもの公園にパチパチ燃える本物の火があれば、そんな「わくわく」が作れるかもしれません。忙しい日常を離れて、大人もちょっとひと息つける時間です。

防災への備えと地域コミュニティの醸成

地域の行事は、いざという時に助け合えるコミュニティを育む重要な機会。イベントの一部として物資や設備のチェック、炊き出しの訓練など、非常時のシミュレーションを。「防災訓練」の名目では来ない人も、つい参加してしまいそう。

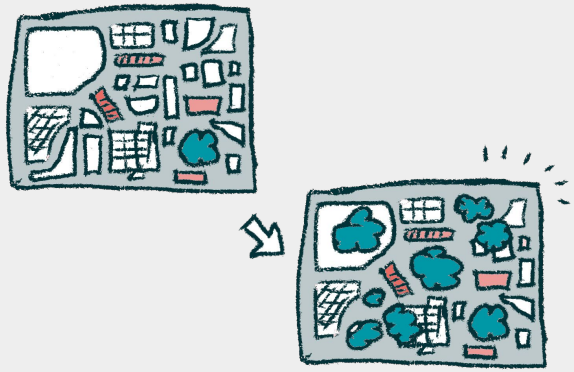
3-2. ストーリー② 地域の人たちのアイデアと手で育てていける公園

犬の散歩で知り合った人づてに、近所の公園の愛護会のメンバーになりました。私たちのかかわる公園では、公園の維持管理と活用が3つの階層に分かれています。これは、20XX年に始まった独自の仕組みで、ベースの１層目は遊具やベンチ、樹木といったハード面の維持管理で、従来どおり横浜市が行っています。２層目は、**草刈りや花壇の管理などソフト面で、地域住民が主体です。誰でも自分のペースや得意分野で参加できるクラブ活動**のような形で、デジタルツールを用いてコミュニケーション。放課後に花壇の水やりをする小学生チームがあったり、保育園児がシニアに教わって花の苗を植えたり。地域の歴史ガイドとして活躍する80代の方もいますよ。

語り手｜稔さん
68歳・元エンジニア

公園活用の３層目は「付加価値の創出」。お祭りや音楽フェス、自然観察やアート・クラフトのワークショップなど多種多様なイベントが住民の企画運営で行われ、**収益は公園の維持管理や新たなプロジェクトに再投資。いろんな人が得意なことで活動したり、小さなビジネスを立ち上げたりして、公園がその舞台になっています。**

こうした活動を地域全体に広げる動きもあります。使っていない**個人宅の庭やガレージなどを、時間を区切って市民に開放してもらう「まちのガーデン・プロジェクト」**です。小さなご近所菜園をつくったり、こどもが庭木を剪定する手伝いをしたり、庭で育った果物を分けてもらったり。都会の子にとっては、スコップで地面を掘り起こすことさえ新鮮な体験、庭の手入れに手の回らない高齢者世帯にも好評です。公園のような庭のような**「半公共」の空間が、このまちの人の活動やコミュニティを育む場に**なっています。



ポイント

誰もが自分のペースで多様な利用・活動ができる場所

公園は花の管理をする人も、ベンチに座っている人も、関わり方や頻度を問わず自分のペースで過ごせる場所。 中には泥遊び、ロープブランコ、たき火、工作、スライダー、落葉プール等ができる公園も。

クリエイティブな利活用と、公共性を守る地道な調整

市民の熱意とアイデアで、公園はもっと愛される場所に。一方、公園は特定の人のものではないため、自治組織のクリエイティビティやオープンな議論に加えて、地道な調整が不可欠。公平性・公共性を担保することが鍵になるでしょう。

まちにひらく、小さなガーデン。半公共空間が活動を育む

まちの社交場は公共スペースだけとは限りません。個人宅や私有地の一部を、地域の活動やコミュニケーションを育む場として開放することで、こどもの居場所づくり、高齢者世帯の見守り、都市緑化、地域の安全対策、空き家対策などさまざまな波及効果も期待できそうです。

3-2. ストーリー③ 信頼できる人たちと、もっと気軽につながれるネットワーク

語り手｜美咲さん
42歳・金融機関勤務

長女ももうすぐ3歳。夫婦で外食したい日もあり、保育所に預けている娘を夕方に迎えに行き、家で待っていてくれる人を探しています。週末は「こどもを預けたい人」と「こどもを預かる人」のマッチングイベントに参加予定。駅周辺や公園などで定期的に開かれていて、「預かる人」として登録している地域の人と話したり、こどもが一緒に遊んでもらったりしながらお互いに相性をみるんです。人に預けるのは心配ですが、こども自身が「この人だったら大丈夫そう」と言った人ならハードルが下がります。親がずっと見ていることはできないし、親がイライラしたらこどもも悲しい。**安心して「手を離せる」環境が必要**なんです。また、なんでもオンラインで事足りる時代ですが、**顔の見える関係や、気軽に頼れる距離感が、子育てには不可欠**と痛感しています。

土曜には地域のオンデマンドタクシーが迎えにきて、小3の息子は習い事へ。保育園に通っている頃からよく利用していて、小学生になってからは1人で乗ります。運転手さんは顔なじみが多く、まちなかをゆっくり走りながら**こどもたちを見守ってくれる、親戚のような存在。**定期的に専門機関での研修を受けているので安心です。自動運転車が増えても、顔の見えるサービスの信頼感は大きいです。

日曜は、スーパーの食育イベントへ。季節の地元野菜を使ったこどもの料理教室で、息子はもはや常連です。地域で運営するライブラリーでは、絵本の読み聞かせも。こどもたちが楽しんでいる間、私は地元の保育園や子育て支援団体によるポップアップデスクで世間話して、ちょっとした悩みを相談したり、知らなかったサービスを教えてもらったり。**身近に頼れる先がたくさんあるほど、自立し安定した子育てができると感じています。**

ポイント

「この人なら安心して頼れる」に出会える仕組み

核家族での子育てに限界を感じつつも、安心できる預け先に出会えなかったり、預けるのに躊躇したり。こどもからも「知らない人と一緒に過ごすのはいや」との声。預ける前に、顔の見える関係性をまずつくり、こどもが自分の意見を言えると、頼りやすくなりそう。

こどもや高齢者等にやさしい送り迎えサービス

地域内の交通サービスは、子育て世帯のみならず高齢者や障害のある人にも欠かせない。こどもが1人でも安心して乗れるような信頼感や親しみは、どのように醸成できるでしょうか。

相談も学びももっと身近に シン・子育てネットワーク

商業・集客施設など身近な場所で、こどもや保護者のためのイベントやサービス、相談の場になれば、忙しい人や専門機関を頼りづらい人＝サポートを本当に必要とする人にも届きやすく。

3-3. 未来市民のストーリーに関連する参考事例

鹿児島

「ただ朝ごはんを食べる会」

日当山無垢食堂で日曜の朝に開催される、羽釜でご飯を炊き、豚汁を作って朝ごはんを食べる会。大人500円・こども250円で、誰でも気軽に参加が可能。そこに集った見ず知らずの人たちが「同釜（おなかま）」として、一緒に朝ごはんを楽しむ。

https://mukushokudo.com/?mode=f1

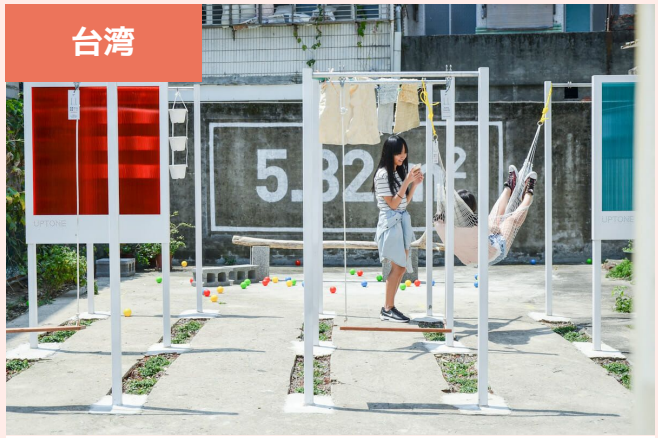
東京

「イクメン」ならぬ「イクジイ」

60歳以上の男性を中心とした「地域のおじいちゃん」が子育てを支援。定年退職後の男性を対象として育児講座を行い、受講者修了者に対して「祖父」と「ソムリエ」を掛け「ソフリエ」として認定することで、地域の子育てに活かす取組。

https://baby.mikihouse.co.jp/information/post-8083.html

台湾



空き地を公園に変えるツールキット

人口密度の高い台北で開発された「ParkUP」は、レゴのようにモジュール化された遊具。密接した建物の隙間にできる小さな空きスペースを、住民のアイデアで活用することができ、幅広い空間と用途に適応する。

https://www.japandesign.ne.jp/interview/taiwanhouse-planb-doubleegrass/

山口

コロガル公園

山口芸術情報センター（YCAM）が開催する「コロガル公園シリーズ」では、市街地に位置する百貨店に遊び場がデザインされた。こどもたち自らがルールや環境をつくりあげ、社会や他者とつながるコミュニケーションの場となる。

https://bijutsutecho.com/magazine/news/exhibition/18006/pictures/3

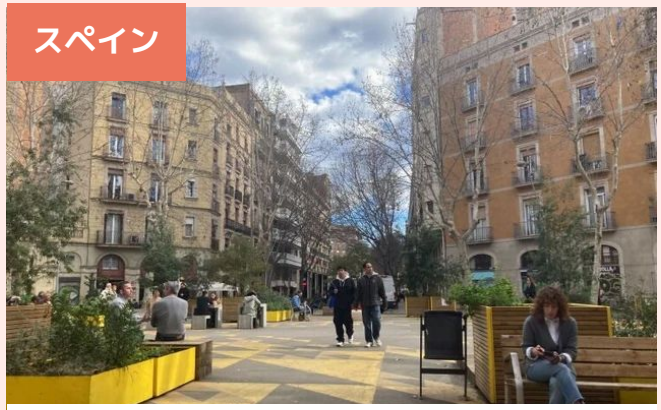
鹿児島

まちに染み出す保育園

3階建ての保育園の1階に、給食と同じコンセプトのお惣菜屋さんを併設。また３階の一部を地域の交流のスペースとして街に解放したことで、園児たちとまちの交流が増え、商店街の活性化やコミュニティの強化に貢献。

https://sotokoto-online.jp/news/3005

スペイン



車道や交差点が人の過ごす場所に

バルセロナ市は、車道を歩行者優先道路へ置き換える都市政策「スーパーブロック」を実施。歩きやすいまちづくりに向けて、もともと交差点だったところに広場をつくり、こどもの遊び場やベンチ、緑が増えた。

https://globe.asahi.com/article/15156873

3-4. 未来市民のストーリーに関するモデル地区での取組（試行）

3-2.に掲載した、未来市民の語る３つのストーリーには、庁内の特定の部局で短期的に実現できる施策から、複数の部局や組織の横断的な連携、あるいは市民との連携なしには実現できない長期的な仕組みまで、難易度も射程もさまざまな取組が盛り込まれています。横浜市では、３つのストーリーに関連する取組を美しが丘公園周辺エリアで令和７年度以降に複数実装する予定です。その一部を紹介するとともに、本事業で寄せられた参加者の声を参考にしながら、令和８年度以降にこれらの取組を拡張あるいは改良する可能性を示します。

Case 1 青葉区・こども青少年局

子育て支援者会場の新設
「もっと子育てしたいまちの実現へ」

子育て支援者会場を新設します。会場は美しが丘こどもログハウス、時間は毎週金曜日９時30分～11時30分を想定。乳幼児が気軽に遊べる環境を提供するとともに子育て世代の孤立化を予防し、親子学習の機会を提供します。

大人参加者から「子育てサポートシステム（※）の提供会員（預かる人）」たちがどんな人なのかをもっと知りたい」という声もあったから、ログハウスで子育てサポートシステムの説明会も行えるといいかもね！

環境が整うと、こどもが恐いと感じることが少なくなるよね。ワークショップでもこどもたちからは「タバコが落ちてて汚い」って意見が聞こえてきたし、トイレなど公園全体がきれいになるといいな

Case 2 青葉土木事務所・みどり環境局・道路局

歩行空間整備

子育てにやさしいみちづくりとして、誰もが安全・快適に通行できる歩行空間を整備する一環として、令和６年度に整備した道路部分に加え、園路部分の整備を実施します。

（※）「こどもを預かってほしい人（利用会員）」と「こどもを預かる人（提供会員）」が会員登録し、会員相互の信頼関係のもとに子育て支援を行う、会員制の有償支え合い活動

3-4. 未来市民のストーリーに関するモデル地区での取組（試行）

Case 3 都市整備局

生活サービスと連携したデマンド型交通

青葉区東部地区（３地区）の生活サービスと連携した新たな公共交通サービス（通称:あおばGO!）について、令和７年度より行政主体の実証実験から企業主体の実証運行へと移行し、令和８年度からの本格運行を目指します。

こどもからは「知らない人の車には乗りたくない」、大人からは「習い事の送迎を、その習い事の人がしてくれるといい。タクシーで送ってくれるだけというのはちょっとちがうかも？」といったコメントが寄せられたんだけど、地域サービスにおける信頼のあり方が大事になりそうだなぁ

「朝、校門が開かずに、道路に沿ってこどもたちがずらっと並んでいて危ない」といった声もあったっけ。こうした朝の居場所が確保されれば、親もこどもも安心だよね

Case 4 こども青少年局

小学生の朝の居場所づくりモデル事業

子育てと仕事の両立を支援するとともに、こどもたちが小学校の始業前の時間に安心して過ごせる環境を整える「小学生の朝の居場所づくりモデル事業」を令和７年度は２校から10校に拡大します。実施校に対しては保護者の皆様への周知時期を早めることで、より利用しやすい事業とします。

その他

公民連携による取組

美しが丘公園周辺では、地域主体のイベントや公民連携の取組など、様々な活動が盛んに行われています。こうした取組においても、未来市民のストーリーで描いた取組を実現できるよう検討していきます。

こどもたちからは今回のワークショップで地域のことを自分たちで考えることも楽しかったし、こんな機会があったらまた参加したい！ってお話ししてくれたこどももいたなぁ。こどもたちも含めて、みんなで街のことを考えるってわくわくするね！

4. こどもが主体的に参加する場をつくるためのミニ実践ガイド

4-1. こどもが当事者として参加する政策立案の場の設計原則
4-2. こどもが安心・安全に参加する場のつくり方：基本となる考え方
4-3. こどもが安心・安全に参加する場のつくり方：具体的な実践方法
4-4. 「こんなときどうする？」 前提となる心構えと具体的な対応事例
対談 こどもと大人が、権利を尊重し合いながら地域の未来をつくるために：考え続けることの重要性

※本ガイドは、こどもの権利に関する専門家として本事業を伴走していただいた**一般社団法人Everybeing**の協力のもと、作成しました。

一般社団法人Everybeing
こどもたちをはじめとする全ての存在「Every Being / 存在」の尊厳をまなざすことを全ての営みの土壌とし、社会が立ち現れるあらゆるプロセスを再構築し、全ての尊厳とともにある視点を共創することを目的とした一般社団法人。2024年設立。
https://everybeing.or.jp/

4-1. こどもが当事者として参加する政策立案の場の設計原則

従来、政策立案のプロセスにおけるこどもの関わりが限定的だったことに鑑み、本事業では、「こどもが当事者として参加する政策立案の場をデザインし、その設計原則を示す」を目的の一つに掲げ、政策課題の形成からこどもが政策共創の主体としてこのプロセスに参加できるプログラム設計に取り組みました。その過程では試行錯誤を重ねながら、現場でのささやかな工夫から設計の大前提となる心構えに至るまで、多岐にわたる気づきと学びが得られました。これらを整理し、以下のとおり5つの設計原則としてまとめました。

1. 独立した人格と尊厳を持った権利主体として、こども一人ひとりと向き合う

子どもの権利条約にも記載のあるように、こどもは「弱くておとなから守られる存在」ではなく、「ひとりの人間として人権をもっている」主体であり、大人と同様に、自他を区別する明確な境界線（バウンダリー）が存在します。この境界線を前提として、本人が傷ついたり、不快に感じる可能性がある言動を極力避けることはもとより、例えばワークショップへの招待状を保護者だけではなくこども自身に宛てたり、会場で呼んでほしい名前を本人に確認したりするなど、一人の人間として向き合い、本人も尊重されている実感をもてることが大切です。また、事業の全体像やワークショップの概要など、参加者として知りたいと思う事柄をこどもにもわかりやすい形で伝える必要があります。この原則を実践する際に肝要となる具体的な心構えや振る舞いについては、本ガイドの4-2.から4-4（pp.33-36）をご参照ください。

2. こどもの意見を大人の価値基準で一方的に解釈しない

こども自身にとっての最善の利益と、大人から見たこどもの最善の利益が常に一致するとは限りません。事業のなかで寄せられるさまざまな意見を分析する際には、運営者や保護者の観点からこどもの意見を取捨選択したり、誤ってあるいは拡大して解釈したりしていないかを常に意識する必要があります。また、分析後は、結論を伝えるだけでなく、どの意見がどうその結論につながっているかを確認するプロセスを丁寧に踏み、主催者（大人）の認識に齟齬がないかを確認するタイミングを設けることが重要です。

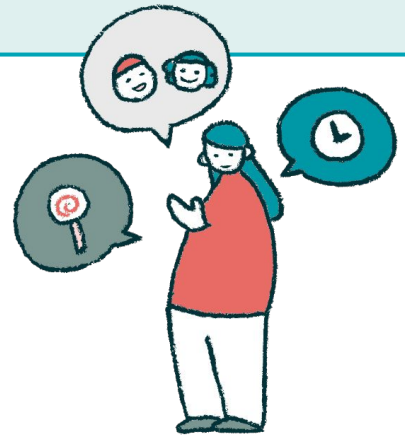
4-1. こどもが当事者として参加する政策立案の場の設計原則

3. 場の権威勾配を緩和する手立てを複層的に講じる

こどもは、大人が求めていることを意識的・無意識的に忖度して発言することがしばしばあります。そのため、こどもの率直な意見を聴くには、彼ら彼女らが自分の考えを言ってもいいんだという雰囲気をさまざまな側面から整える必要があります。例えば、今回のワークショップでは、こどもと大人の間に仕切りを設置したり、スーツや制服など威圧的な服装や、「～課長」など所属や肩書きを含んだ呼び名の使用を避けたり、こどもと話す時は身体的な圧迫感を低減するためにこどもの視点までかがんだりなど、空間・装い・振る舞いなど多角的な観点でこどもの心理的安全性を担保するように努めました。

4. 全ての意思決定に「大人の都合」が入り込む可能性があることを意識する

事業を進める上では、主催者が意思決定を行う場面が多々発生します。その際、大人が主催者であるがゆえに、「大人の都合」、すなわち社会生活の中で暗黙のうちに共有されている価値観や常識がその前提として入り込むことが少なくありません。時間感覚も集中力の持続条件も、大人とこどもでは大きく異なります。こどものお昼寝時間を配慮した開催時間やタイムテーブルの設定、こどもの集中力が途切れることを見越した遊びの準備、さらにはワークショップの前提となる情報を当日ではなく、動画などの分かりやすい形で事前に共有することなど、「こどもの都合」を踏まえた意思決定が重要です。



5. 言語によらない表現方法を可能にする

従来の市民参画の場では、大人の論理的な思考を前提とした議論が主体ですが、こどもが参加する場においては、論理的に整理された発言だけが意見ではないことを踏まえて、言語以外のコミュニケーションや表現を歓迎する仕立てが重要となります。今回のワークショップでは、粘土、イラスト、切り絵、シールなどの非言語表現を支援するツールを用意したほか、こどもが大人の前で発表する場面では不安な気持ちを和らげるために、ぬいぐるみに意見を代弁してもらう手法を採用しました。また、大人の発表については議論で出た意見をグループごとにスキット（寸劇）にまとめて演じることで、こどもの興味関心を引き反応を引き出す工夫を施しました。

4-2. こどもが安心・安全に参加する場のつくり方：基本となる考え方

本事業では、こどもたちが安心して活動に参加できるよう、**こどもの権利が尊重され、その権利が侵害されないための国際的取組「セーフガーディング」**の考え方を参照しています。本パートでは、セーフガーディングの基本的な概念と、その前提となるこどもの権利の紹介、また、事業活動中に発生し得る具体的な事例を取り上げます。また、**地域社会でこどもたちと協働の場を創出する際に重要な心構え**についても記載します。

こどもの権利とは？

日本を含め196の国や地域が締約する国際条約「子どもの権利条約」では、こどもは保護（守られる）の対象であると同時に「権利の主体である」と明確にし、18歳未満の全てのこどもの基本的人権を定めています。本条約には、１つの具体的なこどもの権利に加えて、こどもの権利の全体を貫く４つの一般原則があります。

差別の禁止
生命・生存・発達の権利
こどもの最善の利益（こどもにとって最も良いことをする）
意見表明（意見を聴かれる権利）

こどもの最善の利益を保障するためには、こどもの声に耳を傾け、対話をしながら、こどもにとって最も良いことを探っていく必要があります。当事者であるこどもの声を尊重し、その声を政策立案プロセスに盛り込んでいくことによって、こどもの権利を保障するだけでなく、そこに住む市民の一員であるこどもにとっても良いまちづくりができるでしょう。また、こども自身も事業に参画し、声が聴かれたという経験をすることによって、「もっと参加したい」「もっと意見を伝えてみたい」という気持ちが芽生えるきっかけになるかもしれません。
こどもたちが活動に参加する際には、その活動の中で、こどもの権利が侵害される（結果的に守られなかったということも含めて）ことがないように注意を払う必要があります。そのためにセーフガーディングの考え方がとても重要です。

安心・安全に参加するためのセーフガーディング

こどものセーフガーディングとは、こどもがいる場面において、こどもが権利侵害を受けないようにするための組織的な取組です。安心して活動に参加できること、参加した場所で自分の声を伝えてもいいと思えること、そして、自分の本音や経験を話しても安全に守られることがとても重要になります。

こどもが話しやすい態度・環境づくり

こどもと大人というだけで、無意識にこどもが感じる「権威勾配」に配慮する必要があります。例えば、スーツやネクタイなどフォーマルな服装をしている背の高い大人がこどものまわりをぐるっと囲んでいたら、それだけで威圧的な雰囲気になってしまいます。またこどもにとっては言葉で伝えることだけが「意見」ではなく、ふとした一言や気持ちも意見に含まれます。こどもの意見の表現方法についても、大人側からさまざまに工夫することができます。

話を聴く大人一人ひとりが配慮すべきことと運営主体が体制を整えることを切り分ける

こどもの意見を聴く場にいる大人一人ひとりがこどもの権利侵害をしないようにするということはもちろん大事ですが、それ以上に、**セーフガーディングは組織が責任を持って取り組むもの**です。こどもの権利が守られる体制や運営を考えなければなりません（詳細は次のページ）。こども家庭庁によるガイドラインもぜひ参考にしてみてください。

4-3. こどもが安心・安全に参加する場のつくり方：具体的な実践方法

ここでは、こどもたちが安全に参加できる環境実現を助ける具体的な取組を紹介します。これが全てではありませんが、これを土台に、各地でより良い環境づくりについての議論が続き、内容が更新されていくことを願います。関係者全員で価値観を共有し、試行錯誤を続けることが最も重要です。

運営主体による取組

事前　こどもの権利に基づいた体制の整備

▶ 体制づくり

こどもの権利やセーフガーディングについて、組織としての認識共有をし、行動指針を策定する。

▶ 研修の実施

運営者全員にセーフガーディングの概念を共有する研修を行う。現場で想定される具体的な状況に対して、ロールプレイなどを活用すると学びが深まりやすい。

▶ 運営のためのツール整備

運営の行動指針、個人情報保護について明記した参加者用の同意書、行動指針を反映した運営チーム内のチェックリスト、事後の振り返りリストなどの文書を作成する。

▶ 第三者相談窓口の設置

必要に応じて、外部の相談窓口を設置する。

▶ 余裕のあるスタッフ配置

人員に余裕のある運営体制を構築し、相互の連絡方法を明確にする。特に、セーフガーディングの知識・経験を持つメンバーを専任の相談役として、特定の役割に縛られず全体をフォローする「遊軍」として配置する。

実施中　セーフガーディングに基づいて実施

▶ 行動指針の共有と合意形成

イベント当日に、行動指針を再度共有するとともに、チェックリストや役割分担の確認を行う。参加者に対して、事前または当日に同意書を取得する。

▶ 専門知識を持つメンバーによるサポート体制

セーフガーディングに関する知識と経験を持つメンバーが、会場全体を見てフォローする。例えば、会場の死角チェックや、こどもと大人が二人きりにならないための配慮・サポートを行う。また、運営メンバーには、気になる点や不安があればいつでも相談できることを定期的に伝え、安心感を高める。

事後　フォローアップと振り返り

▶ 参加者へのフォローアップ

アンケートや簡易インタビューを実施。当日に表現できなかった意見はないか、不快・不安な思いをすることがなかったかなどを確認し、意見表明の機会を保証する。

▶ 振り返りの実施

次回に向けて改善・継続・見直す点を洗い出す。参加者から寄せられた意見を参考に、参加者が安心・安全に参加でき、声を上げられる体制の強化につなげる。

4-3. こどもが安心・安全に参加する場のつくり方：具体的な実践方法

ここでは、こどもたちが安心・安全に参加できる環境実現に向けた具体的な取組を紹介します。これが全てではありませんが、これを土台に、各地でより良い環境づくりについての議論が続き、内容が更新されていくことを願います。関係者全員で価値観を共有し、試行錯誤を続けることが最も重要です。

参加者に向けた取組

事前　参加者へのセーフガーディングの共有

▶ 大人へのイントロダクション

参加者及び関わる大人全員に対し、セーフガーディングの基本概念と行動指針を共有する。チェックリストと同意書を用いて、必要事項の周知を徹底します。メディア関係者が関わる場合も含め、全ての大人に適用する。

▶ こどもたちへの導入説明

参加するこどもたちに対し、こどもの権利やセーフガーディングの目的について紹介し、こども自身による、安全確保の重要性の理解を促す。また、大人がどのような約束をしているかを知ることで、何か問題があった際にこどもが自ら声を上げやすい環境を整える。

実施中　安全な環境と相談機会の保障

▶ ルールと相談先の共有

イベント開始前に、セーフガーディングに基づく行動指針を改めて共有する。また、気になることや相談したいことがある場合の具体的な相談先（担当者）を案内する。

▶ 相談機会の案内

気になることがあれば相談できる環境を整え、相談窓口の連絡先を案内する。これにより、参加者が安心して過ごせる体制を維持する。

事後　継続的な相談機会の保障

アンケートを通じて参加者の状況や意見を確認し、対応につなげる。また、権利が守られていないと感じた場合や不安を抱えた際に相談できる窓口を改めて案内する。

4-4.「こんなときどうする？」前提となる心構えと具体的な対応事例

セーフガーディングや、その背景にあるこどもの権利を理解していても、現場で発生する事態にとっさに対応できるとは限りません。ここでは、こどもが参加する場をつくる際に前提となる心構えと、イベント実施中に起きがちな具体的な対応事例を紹介します。

前提となる心構え

こどもが安心・安全に参加できる場を設計する上で最も重要なのは、こどもを権利の主体として認識し、その尊厳を尊重することです。それは**自分と他者が別の人間であるという境界線を意識する**ことでもあります。例えば、傷つく言葉の基準や触られて不快な場所は一人ひとり異なります。さらに、権利の主体として常に本人の気持ちを尊重することを心がけ、必要以上に手伝わないように意識する必要もあります。また、イベントやワークショップの当日に限ったことではありませんが、**こどもが自分自身の身体に対して持つ大事な権利に自覚的である**ように、自分だけの特別な身体の一部（プライベートゾーン）を見られない・触れられないなど日頃から会話しておくことも肝要となります。
下記の事例のように、こどもからハグをされたり好意的な言葉をもらうことで、自身の行動がこどもたちの役に立っていると実感する場合もあるかもしれません。でも**その背景にあるのは、目の前の大人に対する感情だけでなく、家庭で保護者との関係がうまくいっていなかったり、こども自身の辛い気持ちを整理するための行動の現れという可能性も**あります。こどもたちと安全に活動するためにも、彼ら・彼女らの取る行動ひとつひとつの背景にある理由を、常に一度立ち止まって考えることが大切です。

具体的な対応事例

Q. こどもが背中に乗ってきたり、抱きついてきたら？

突然抱きついてきたり、背中に乗ってきた場合は突き放したりせず、一度受け止めた上で「あっちに〇〇があるよ」「一緒に〇〇しよう」など他に注意を向けられるような声がけをしながらそっと離れます。

Q. トイレに行きたいと言われたら？

こどもと2人きりにならないよう、他のこどもたちやスタッフにも声がけをして複数人で行動しましょう。低年齢のこどもの場合にも、必要以上に手を貸す前に、「一人でできる？」「困ったら教えて」と本人のできる範囲を確認しましょう。

Q. こどもがケガをしてしまったら？

事前にケガなどのリスクを軽減する策をとり、怪我や災害への対処法はを用意しておきましょう。手当ての際、抱っこしたり膝に乗せたりと必要以上に本人に触れず、本人ができることを必要以上に手伝うことはしないように心がけます。

Q. また会いたいから連絡先を教えてほしいと言われたら？

個人的に会ったり、プライベートの連絡先は教えることができないとはっきり伝えましょう。そのうえで緊急時や個別で相談したいことがある場合は、別途面談を設けたり、団体の相談先や緊急で連絡できる場所を伝えましょう。

対談　こどもと大人が、権利を尊重し合いながら地域の未来をつくるために：考え続けることの重要性

実践を通じて明らかになった、地域社会でこどもたちと協働の場を創出する際に重要となる議論のポイントについて、本事業を伴走していただいた（一社）Everybeingとともに考えます。

リ・パブリック：今回の事業は、「こどものセーフガーディング」を参照しながら設計しており、本レポートはここまで、こどもが安全に場に参加するための場のつくり方を、具体的な体制やシーン例を交えてお届けしてきました。ここでは、少し具体例から離れ、こどもの安心・安全な参加のための態度や姿勢を考えていきたいと思います。そもそもセーフガーディングの発祥は、特定の組織がこどもの安全な参加を保証するための仕組みでもありましたね。それを地域づくりに導入する際、何らかの違和感が生じる可能性についてはどうお考えですか？

Everybeing(以下EB)：そうですね。事業や活動に取り組む際に、その土地や地域にあるこれまでの人間関係や文化風習が、セーフガーディングの基本的な概念ーこどもの権利に根ざして、安心安全を育むーをあまり意識していない場合、セーフガーディングが推奨する振る舞いに違和感を感じることもあるかもしれません。

リ・パブリック：その違和感はどうしていけばいいのでしょうか？

EB：すぐに明らかな答えを出せることではないと思います。ですが、こどもと大人の関係における権威勾配は、何も政策立案などの事業の場に限らず、日常的に存在します。だからこそ、地域社会でこどもたちと協働の場をつくる機会を通じて、地域における日常生活の中でも、例えばこどもとの力関係を自覚し、そもそもの関係性を見つめ直し、アップデートしていく必要があります。

リ・パブリック：例えば、どのようなことを意識して取り組むといいですか。

EB：こどもの権利に立ち返り、こどもの最善の利益を、本人に聞きながら考え続けることが大切です。例えば、相手に許可なくハグをしたり、一方的にあだ名をつけるなど、大人同士では決してやらないような振る舞いを、こどもに対しては無意識にしてしまっているかもしれません。自分たちの振る舞いを「こどもの権利のメガネ」をかけて見つめ直し、こどもたちに意見を聞きながらより良い振る舞いについて一緒に考えることが、互いの権利が大切にされる関係性なのではないかと思います。

リ・パブリック：なるほど。こどもの権利が大切にされる場や地域は、大人も含めた全員の権利が尊重される場だということですよね。この両者が矛盾するものではないことは、本事業を通して私たちも学んできました。

EB：また、セーフガーディングの考え方に即すると、行動指針からは外れる行為が、悪意なく発生することもあります。例えば前頁で示した例のように、こどもを安心させるためにこどもの求めに応えたものの、こどもの権利を侵害する結果になる可能性もありますよね。アクシデントが起きた場合に重要なのは、個人の責任に帰すことなく、まずは双方の身体的・心理的安全性を確保し、なぜそれが起きてしまったのかという背景を構造的・組織的に捉え、対応・対策を組織ぐるみで検討し、組織も個人もアップデートし続けていくことです。

リ・パブリック：どうすれば地域もともに柔軟にアップデートしていけるでしょうか？

EB：先ほども触れたとおり、権利という視点で日常を振り返ることが鍵だと思います。試行錯誤しながら、概念や原則を地域の中で少しずつ共有・蓄積していくことが大切です。

リ・パブリック：どんな組織や地域にも通じる普遍的な答えはないので、ともに考え、更新し続けることが重要だということですね。

EB：そうですね。地域づくりは長期的な取組です。こどもも大人も互いに尊重し合い、お互いに尊厳をもった一人の人間として、相互に存在を尊重する価値観をコミュニティの中で育てていくことが重要です。このような取組を続けることで、こどもを含めた全ての人の権利を守り、地域全体がより良い方向へと変化していくと思います。

まとめ｜本資料の活用に向けて

こどもが、生活のあらゆる領域において政策共創の主体となる社会を目指して

地域が必要とするもの、あるとその地域がより良くなるものを最もよく認識しているのはその地域に住む人々である、という信念のもと、この事業は始まりました。この信念に基づいて考えれば、市の基本戦略で掲げる「子育てしたいまち」を実現するためには、当事者であるこどもや保護者と対話し、その声に耳を傾け、共に考えることが最も効率的かつ効果的であるはずです。しかし、現実には、その声を聴くこと自体が目的化し、形だけの取組になってしまうことがあります。また、こどもが主体的に参加できる場がつくれたとしても、その対象が小学生や中学生以上に限られ、言葉での表現が難しい幼児の声が除外されがちである点も課題の一つです。
こうした問題意識から本事業を立ち上げたのですが、**事業を進める中で、大人の常識や都合が障壁となる場面が多々**ありました。例えば、イベントの日程を決める際、お昼寝の時間や習い事の曜日を考慮する必要があるなど、大人の視点だけでは見落としてしまう点が少なくありません。その過程を記録し、こどもの声に真摯に耳を傾ける場を丁寧に設計することの重要性を改めて実感しました。その結果、**「こんなにしっかり話を聞いてもらえて嬉しかった」「自分の住むまちについて考えるきっかけになった」**といったこどもたちの声や、**「迎えに来たとき、こどもたちが自信にあふれた表情をしていた」**といった保護者の声が寄せられました。たとえアイデアがそのまま実現しなくても、意見が大人によって歪められることなく報告書に反映され、フィードバックされることが、こどもの自己肯定感や自己効力感の向上につながるということを改めて身に染みて感じた次第です。
最後に、こどもが当事者になるのは子育て支援やこども施策に限定されません。こどもは社会の未来を担う大切な存在です。その観点から見れば、**こどもは生活全般に関わるあらゆる領域で当事者である**といえます。**今回得た知見を子育て分野にとどまらず、市政の他の分野や全国へも広げていきたい**と考えています。また、昨年の調査で得られた子育て世代のインサイトや本事業を通して寄せられたこどもたちの声を土台にモデル地区での取組を進めつつ、特定の政策・施策の立案・実装にとどまらない、オープンで持続的なデザインプロセスの継続も図っていきたいと考えています。

『ミニ実践ガイド』の活用にあたっての留意点とお願い

本資料の末尾にまとめた『ミニ実践ガイド』には、こどもが政策立案に参加する場を今後つくりたいと考えている方々が手軽に参照できるように、我々が本事業を通して作成した場の設計原理やその場で注意すべき事例などを掲載しました。一方で、前頁の対談でも触れているように、尊厳をもった主体としてのこどもと向き合う最善の方法は一律に決まっているものではなく、実施地域にすでに存在する共同体のあり方や、事業に参加する住民同士の関係性によって精緻に調整する必要があります。そのため、**『ミニ実践ガイド』に記載されていることをそのまま実践すれば十分ということではなく、常に全体の状況や参加者の状態を見極めながら、試行錯誤を続けることが肝要**となります。
本資料が、全国で広がりつつある「こどもまんなか社会」の実現に向けた取り組みを推進する一助となることを願っています。また、こうした取り組みに関わる皆さまが、**その過程で得た知識やノウハウを、より良い実践へとつなげる共有知として社会に広く開いていただければ幸いです。**

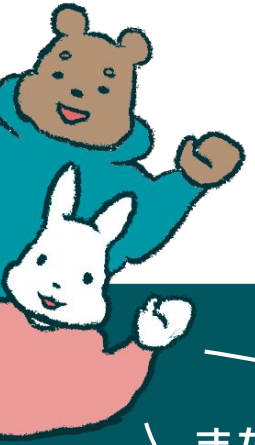
こども参加者の皆さんへ

今回、『みんなの「やりたい」から始まるまちの政策デザインラボ』に参加してくれて、本当にありがとうございました！ワークショップに参加してくれたり、じぜんに動画をみてくれたり、なんども確認してくれたりと、たくさんの知恵とパワーをわけてもらいました。
皆さんの大切な意見や思いがなかったら、この資料をつくることはできませんでした。
横浜市がこれからこどもの皆さんやご家族の皆さんにとって「ずっと住んでいたい！」と思えるまちをこれからつくっていく中で、この資料はとても大事なものになります。

あらためて、ありがとうございます！
最後に、今回の会をきっかけに、まちを自分たちでよくしていく話し合いや活動に、これからも参加してくれたらとてもうれしいです🐰🙏🐻

大人参加者の皆さんへ

このたびは、ご多忙の中、本事業にご協力いただき、誠にありがとうございました。
ワークショップへのご参加はもちろん、事前動画のご視聴や度重なる確認作業など、多くのご負担をおかけしたことと思います。
皆様からお寄せいただいた貴重なご意見や想いがなければ、本資料を作成することはできませんでした。
今後、横浜市が「こどもまんなか社会」および「子育てしたいまち 次世代を共に育むまちヨコハマ」の実現を目指すうえで、本資料は重要な指針となる予定です。
皆様のご協力に改めて心より感謝申し上げます。



また会おうねー

横浜市　みんなの「やりたい」から始まる　まちの政策デザインラボ　実施報告書

本報告書は幅広く読まれ、活用されることを目指して作成しました。
引用の際は、上記の報告書名をご明記ください。
また、写真のみの転載はご遠慮ください。

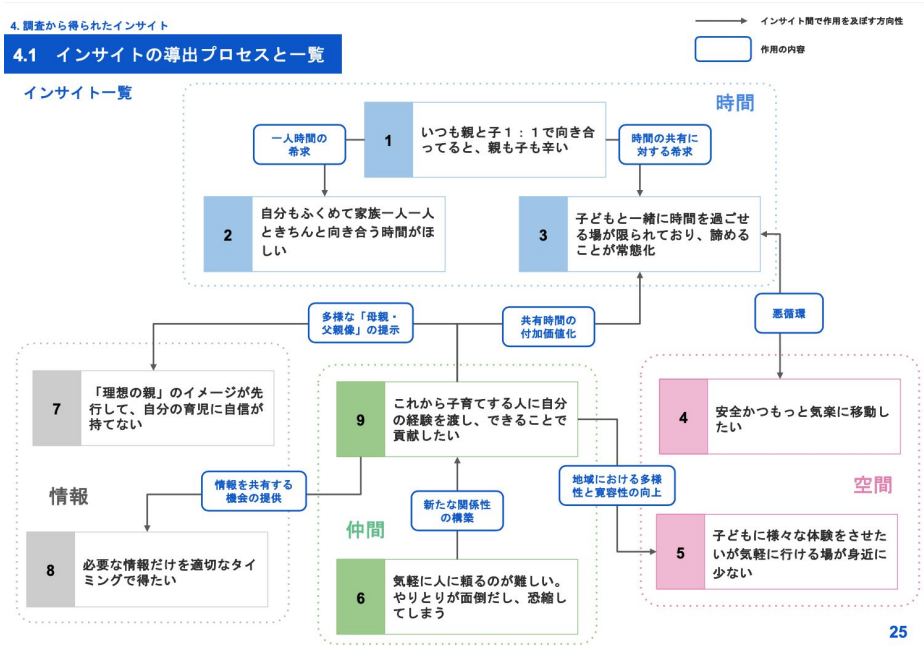
発行｜横浜市政策経営局経営戦略課
作成｜（株）リ・パブリック
アドバイザー｜（一社）Everybeing
写真撮影｜玉越信裕
イラスト｜廣瀬花衣　（株）リ・パブリック

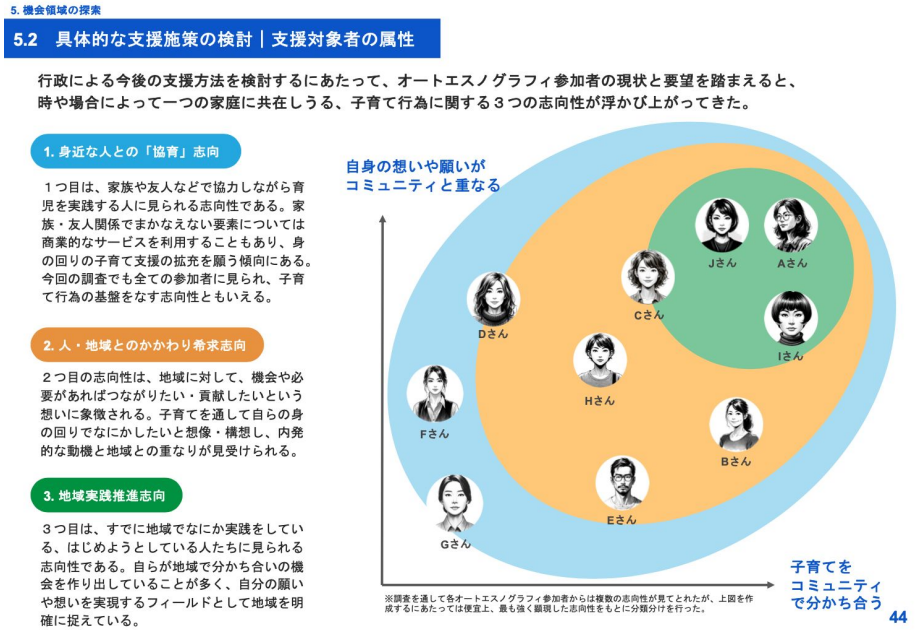
別冊｜参考資料及び本事業の中間制作物

1. 令和５年度子育て世代の日常生活に関するインサイト分析委託　最終報告書
2. 「まちの政策デザインラボ」ワークショップ２に向けた大人参加者用の補足資料
3. 分析会２で使用した背景カード

※資料２及び資料３は事業実施中の中間制作物です。掲載されている意見は全て参加者個人の意見です。

資料１｜令和５年度子育て世代の日常生活に関するインサイト分析委託 最終報告書





本報告書は横浜市ウェブサイトからダウンロードできます。
下記のQRコードまたはURLからアクセスください。

https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/seisaku/torikumi/sonota/R5_insight.html

まちの政策デザインラボ

ワークショップ２に向けた大人参加者用の補足資料

株式会社リ・パブリック

この資料の位置付け

- この資料は、11月10日(日)に実施予定のワークショップ２に向けて、ワークショップ２の事前動画の補足資料として、大人の参加者の皆様用に作成しました。
- 主な目的は、皆様にご参加いただいたワークショップ１以降、横浜市ならびに事務局のメンバーで行ったまとめや考察の結果及びプロセスの共有です。皆様の発言やコメントがどのように本事業の成果として記録され、またワークショップ２に反映されているのかを、事前に余裕をもってご確認いただければと思います。
- 同時に、情報共有を事前に行うことで当日の所要時間を短縮し、こどもにも大人にもより参加しやすいワークショップを目指しています。

ワークショップ１以降の大まかな作業工程

1. 振り返る

ワークショップ１の直後に行われた施策検討セッション１では、横浜市職員と事務局メンバーが、皆さんから寄せられた意見を、ワークショップの時間内に発表されなかったコメントなども含めて振り返り、関連する地域情報や横浜市の政策方針とともに確認した。

2. まとめる
トピック化

施策検討セッション１で得られたデータをもとに、改めてワークショップ１でどんな種類の**「トピック」**が出てきたのか、なるべく主催者側のバイアスが入らないように意識しながら、網羅的に整理した。

3. 整える
テーマ化

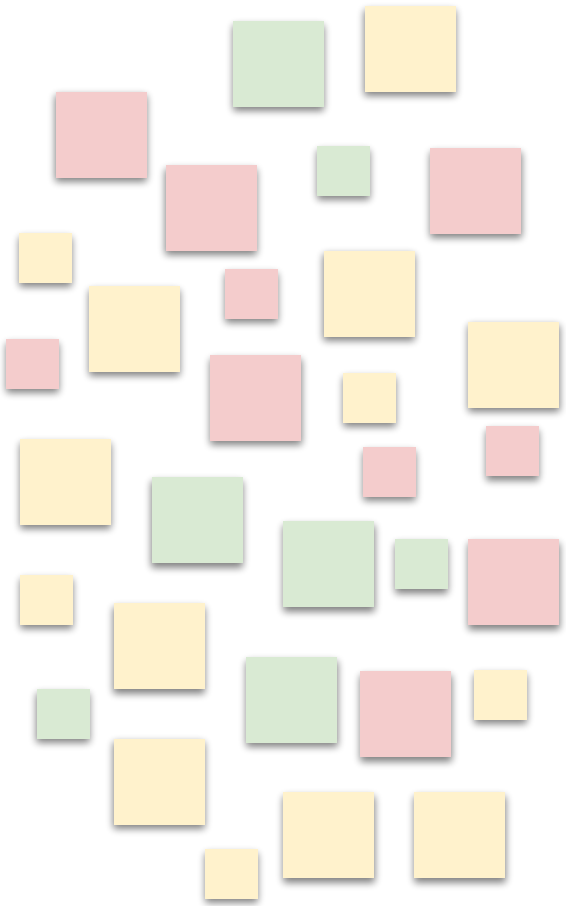
ワークショップ２で、ふたたび参加者の皆さんと深め・広げるに値する「議論の発展性」や、「大人とこどもの双方に強く関連していること」、そして「公園の内外に落とし込める可能性」などを考慮しながら、議論しやすい大きさの６つの**「テーマ」**に収斂し、うち４テーマに注目した。

4. 絞りこむ

3.で整えたテーマを見渡して、テーマ間に共通する要素を考慮しながらワークショップ２の限られた時間の中で効果的に検討できる内容とスコープに絞りこんだ。

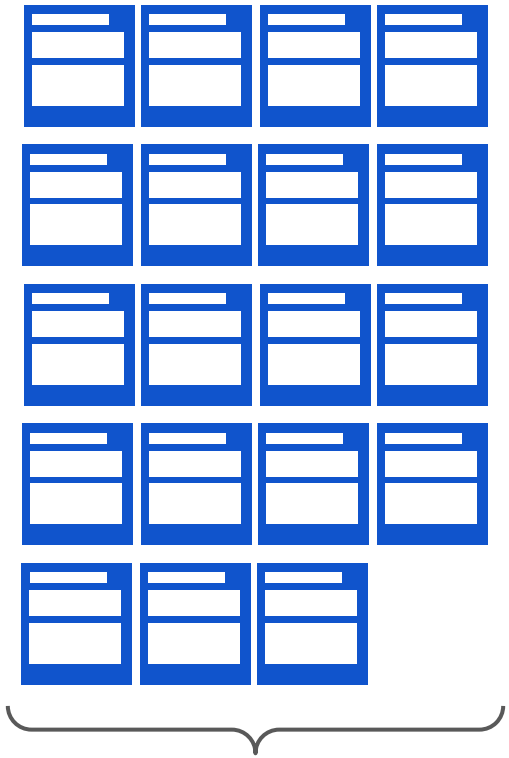
ワークショップ1以降の作業イメージ

1. 振り返る
p.5



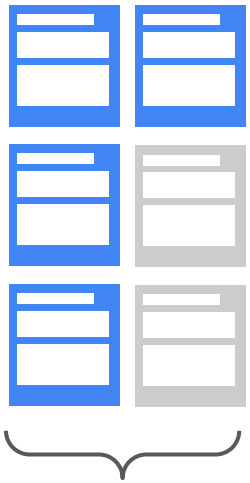
ワークショップ1と
施策検討セッション1で
寄せられた意見や考え

2. まとめる
pp.6-12



19のトピック

3. 整える
pp.13,14



6のテーマ
（うち、ワークショップ2に
向けて検討対象となるテーマ
は4つ）

4. 絞りこむ
pp.15,16

ワークショップ2
の方針と問い

1. 振り返る

参加者の皆さんから寄せられた意見を、ワークショップの時間内に発表されなかったコメントなども含めて振り返り、関連する地域情報や横浜市の政策方針とともに確認した上で、その後の議論の基盤をつくりました。

2. まとめる（トピック化）

施策検討セッション１で得られたデータをもとに、改めてワークショップ１でどんな種類の「トピック」が出てきたのか、なるべく主催者側のバイアスが入らないように意識しながら、網羅的に整理しました。作業の結果、下記の19のトピックが上げられました。

#	トピック	参加者から寄せられた声・意見
1	こどもがそれぞれのペースで、自分が好きなことを、のびのびとできたり過ごしたりできる環境	• WSで参加者が発した発言をお書きください。 • 遊具やロケットハウスを低学年と高学年で分けてほしい（小学校低学年） • のぼれる木があるといい（幼児、小学校低学年） • ボール遊びがしたい • じゃぶじゃぶ池で遊びたいのに浅いから楽しめない • じゃぶじゃぶ池が小３までだから遊びたくても遊べない、もっと大きい子も使えるようになって欲しい（小学生）
2	ゆっくり休んだり、本を読んだり、屋内で身体を動かしたり、おやつを食べられる	• 屋根があるベンチが欲しい • こどもがいる場所がない • 座りにくいベンチ • 日陰が少ない（砂場、遊具） • おかしを食べる場所がない • テーブルが欲しい • 水飲み場が2箇所だけ（偏りがある） • 公園の前の空き地に図書館や体育館がほしい • タバコ吸っている人　くさい、〇〇
3	遊びやすい緑が増えて欲しい	• 蚊がイヤ • 虫除けはしたくない、けどしないと刺される • この前とんぼを9ひきつかまえた • 明るい草むら • 公園の草ぼうぼう

2. まとめる（トピック化）

#	トピック	参加者から寄せられた声・意見
4	怖いところ・危ないところは減らして、使いやすく、移動しやすくして欲しい	• 公園のトイレがこわい • 団地　暗いから怖い（あかりがほしい） • 百段階段が全部スロープがあるといい • 団地　階段がイヤ、ねずみがいや。エスカレーターにしてほしい（つかれる） • がいこつの模型が怖い、リアルすぎ • 街のオブジェが気持ち悪い、こわい（夜ライトアップされる時塾の帰り一人で通る）→違うキャラクターに変えたらOK • 駅のエスカレーター遅い、いちいち止まる • 公園（ジャンプロープ）　怪我、骨折した人がいる、楽しいけど
5	夜も安心して歩ける街づくり	• 三角公園が暗い／怖い（手前の遊具があるところに街灯が1つあるが、奥は街灯がなく木が生い茂っており日中でも暗い） • 団地の道路が暗い／怖い • ロケットハウスの奥やトイレのあるあたりが暗い
6	水分補給ができて、汚れたら手や足を洗える水場	• 砂場のそばに水場がほしい

2. まとめる（トピック化）

#	トピック	参加者から寄せられた声・意見
7	無料で（お金の有無を気にせず）、本を読んだり、こども同士で集まったり、遊んだりできる場所	• ロケットハウスは無料だからいい！ • こども同士でフードコートに行ってたこ焼きを食べる • 図書館が欲しい • Wi-Fiが使える場所があるといい
8	自分たちに関わることを自分たちで考えたり選んだり決めたりする	• 給食をバイキングにしてほしい！ • エスカレーターやエレベーター、大人は使っているのになんで私たちは使えないの？
9	安全に安心して、遊べたり過ごしたりできる場所	• タバコのにおいがくさい • ゴミが多く落ちている
10	こどもだけで家を出られる・まちで遊べる	［大人］ • 高学年の居場所がない • こどもの手を離しても、こどもがいける場所 • （WS中はこどもだけでOKと伝えると）「いいんですか？」とるんるんで出かける保護者 • 公園の前のコンビニは、こどもにやさしい。テーブル、椅子、ゴミ箱が外に設置されている、お月見でススキをくれる。（保護者） ［こども］ • 駅のフードコートが好き。友達と行ってお小遣いで銀だこを食べて遊ぶ。（小学生） • 駅の中や商店街のお店がお洒落で、イケてて好き。でも高いから時々家族と行く。（小学生2） • ロケットハウスは無料だからいい（小学生1） • 「美しが丘公園のトイレが怖い」「三角公園の街灯が少ない」など危ないと感じる声があちこちで上がった

2. まとめる（トピック化）

#	トピック	参加者から寄せられた声・意見
11	思いっきり遊びたい	［こども］ • 登れる木が欲しい/飛び降りたい/ブランコはもっと高い方がいい（怖い、でもスリルを楽しみたい） • 公園は砂利が飛ぶから縄跳びしたくない • 小さい子が気になる、大きい子がこわい • 三角公園は蚊が多いから遊ばない • 虫除けをして遊びに行く/虫除けしたくないから行きたくない • リスがいたらいいな（生き物と関わりたい） ［大人］ • 関われる緑が欲しい • 「虫取りがたのしい公園になると良い」（大人A） • こどもの世界が学童やキッズクラブといった施設に押し込められている • 整備されすぎてるので、もうすこしアドベンチャー感のある公園だといい（大人A）
12	（こどもと一緒に）気を遣わずに過ごしたい	［親として］ • こどもと一緒にわいわい過ごしたい。 • 子連れが「うるさい」と言われない店・場所。 • 公園近くのおしゃれカフェ、パン屋は高い。こどもを連れて気軽にこようとは思えない感じになってしまった • 手を離していける場所 ［まち全体の雰囲気が］ • まちにいる人がみんなおしゃれ • 商店街の昔ながらのラーメン屋さん、若い頃から30年通ってる。OL時代はシメのラーメンを食べた思い出あり • サイゼリアがなくなって、ファミレスがない • 中学受験をして地元を出ると地域のイベントに参加しづらい

2. まとめる（トピック化）

#	トピック	参加者から寄せられた声・意見
13	日常の中で、ひとが少し休める	［日常の中で楽しめる、落ち着く空間］ • 中学受験をして地元を出ると地域のイベントに参加しづらい • わざわざ遠くまで行かずとも公園でBBQしたい。車じゃなければお酒も飲める（大人A） ［ベンチ・テーブル］ • 公園の中にすら、座って過ごせる場所が少ない。ブランコの周りのバーなどに座るしかなかった。 • 商店街の店先に椅子やテーブルもいくつかあるが、座って過ごしていいかわからない。 • 働いている世代がほっとできるベンチや植え込みなどがあるといい • レジャーシートを敷けそうな場所がなかった • 公園のベンチ周辺は、夕方になるとタバコを吸っている人がいて、タバコくさい（小学生2）
14	ちょうどいい距離感で過ごしたい／現代の「社交」	［地域があるといいが、大規模すぎても困る］ • 多世代が楽しめるイベントがある「こどもの会はハレの場」「ラジオ体操の話」（大人） • 旧市街地と違い地縁が薄い • ステージがあれば、老若男女もっと集まる機会が増える。 • 親が飲みながらこどももあそべる？ • 駅の近くの公園に夕涼み会があってなじみがある⇄ お祭り（タマフェス）人が多くてうるさい。道が狭いのに… • 路上お花屋さんをこどもが手伝うことで多世代の対話が ［こどもの社交場について］ • こどもにとっての社交場⇄こどもは本当に社交をしたいのだろうか？ • 有料でも、こども食堂があるといい • 塾に行く子はそこで友人と出会う • 塾に行かない子が安心して集まれる機会が公園周辺にほしい（大人）

2. まとめる（トピック化）

#	トピック	参加者から寄せられた声・意見
15	とっさに頼れる先がある	［子育てに関して］ • 気軽に人に頼れない。表出していない。 • 気軽に助けてと言えない。（スキのない大人・SNS映え） • 何が必要かじっくり対話する機会が必要 • 思いついた人がそのままやるからつつがない • 自己完結型（周りとつながる必然性がない自分に自信があり、頼れない→ これは自立とはいえない） • 求めるサポートの変化（ファミサポであれば、車が必要など→車の運転などが必要になるサポートを受けたい場合お願いできる人が限られる。 • 互いに融通をつけ会える関係支援も必要 • 幼稚園や保育園の後にキッズクラブや習い事に行っているが、両親とも仕事をしている家の子は平日の習い事が難しい。ファミサポ、習い事などにこどもだけで送ってくれる送迎タクシーなど、実はこどもが楽しく、大人も安心できるような、助けてくれるサービスはたくさんある。みんな調べるが、自分の使いたいものがうまく見つからない。困った時に、そこにうまく辿り着けるようになったらいい
16	安全に生活したい	［大人］ • あの交差点が危ないので信号をつけるなりして欲しい • 交通量が多すぎる • 水没エリアが怖い ［こども］ • お友達が公園の遊具で骨折した（小学生2） • 公園の目の前の道路に、ドッジボールをしていたらボールが外に転がって行った（小学生2） • 駅のエスカレーター遅い（小学生2） • 団地の階段がいや、100段階段がいや、スロープがいい • 団地が暗くて怖い、灯りが欲しい

2. まとめる（トピック化）

#	トピック	参加者から寄せられた声・意見
17	ママもパパも、みんなが大変な時に「助けて！」と言えるまち	• 適切な人に出会うまでに調整が必要で、働きながらクリアするのは大変 • マッチングしたと思ったら遠い人で、車がないとお迎えがいけなかったり、思ったより高齢者だったり。 • 長時間保育→学校&児童クラブで生活は完結していて、地域のさまざまな場所にアクセスすることが親の時間的にも難しい • 地方出身で地縁のない私には、頼れる場所がとにかくない！（地元育ちの人が多い一方で）
18	こどもが今まで知らなかった人と（みんなが「安心」して）出会える場	• 昔は鷺沼プールが社交場だった。その後も東急の中のプールがあったが、それもなくなってしまった。 • 地域にこどもの社交場がなくなった気がする。 • ポップアップのお花屋さんを手伝うこどもたちが実はいる。 • その子たちが近くで倒れたおじいさんを見つけて、救急車を呼ぶということもあった。 • ドーナツ公園が活動場所となっている有志のラジオ体操の会では、パワフルな高齢者が集まっていて、そこにこどもたちもダンスリーダーとして参加していた。
19	店という「機能」に閉じず、さまざまな経験が共有され・発生する場所	• 〇〇のケーキ屋さんは何かがあると必ず行った • 〇〇のプールは、こども同士だけで初めていく場所 • こどもの初めてのおつかいを見守ってくれるパン屋さん • 路上でポップアップの花屋さんができる時は、こどもたちがお手伝いをしていることもある。そのこどもたちが倒れたおじいちゃんを見つけたこともあった • 駅前が開発されてからみんないなくなった。大きいところができた代わりに小さいところがなくなった • 今はデパ地下で代替している（店主との個人的な繋がりはない）

3. 整える（テーマ化）

ワークショップ２での「議論の発展性」や「大人とこども、双方への関連性」、「公園の内外に落とし込める可能性」などを考慮しながら、19の「トピック」を議論しやすい大きさの６つの「テーマ」に収斂し、うち４テーマに注目しました。

#	テーマ	キーワード	関連するトピック
1	まちに小さな「社交場/遊び場」をたくさんつくる	• こどもが今まで知らなかった人と（みんなが「安心」して）出会える場 • 人々の経験が共有される場 • 家族に閉じない場 • 適度な距離感で人と繋がる • 社交、コミュニケーションも「成長」に関わる。 • 育つ権利に「あそび」が含まれる	14, 18, 19
2	日常の中に、少し休める/ほっとできる場所がある	• 街の空間に、個人が少し休めるゆとりがある、 • 忙しい日常に、時間的・心的ゆとりをもてる • 精神的に頼れる、サポートが求められる	1, 2, 6, 7, 13, 15
3	困った時に気軽に頼れる人・場所・サービスがある／頼り先がたくさんある	• すでにある公的支援を、誰でも知れる、使える情報設計 • 市民「サポートしてもらえる／してあげられる」状況の可視化、促進（＝サポートを普通のインフラに）」 • フィジカル／ソーシャル、行政による／市民による • 孤立しない子育て、育ち • 防災はムリでも、減災はできる。取れる手段が複数ある／ゆるさの発信／緊張をゆるめる／	5, 7, 18

3. 整える（テーマ化）

#	テーマ	キーワード	関連するトピック
4	自分のペースで思いっきり遊べる	• やりたいことを思いっきりしたい • やりたいようにやっても怒られない • アイデアはたくさんある • 他人に気を遣いすぎたくない	1,7, 10, 11, 12
5	自分たちに関わることを自分たちで決めて、伝え、実行できる	• おとなもこどもも、決まりの中でやりたいことを我慢している • おとなは、積極的な受け身姿勢が身についている	8,11
6	安心・安全なインフラ	• こどもだけで家を出られる・まちで遊べる • 夜も安心して歩ける	3, 4, 9, 10, 16

テーマ5,6に関する補足

事務局メンバーでの議論の結果、テーマ5は当事業の大前提であり、かつ他のテーマにも通底する内容になっているので、改めてワークショップ２で扱うべきテーマではなく、グランドルールとして位置付けることとしました。また、テーマ6については、ワークショップ１にて多くの関連するご意見をいただきましたが、ワークショップ２での議論の広がりが見込めないため、インフラ整備に対する市民の声として承り、市の該当部署にお伝えいたします。以上の理由で、テーマ5と6は、本事業のワークショップ２で取り上げるテーマの検討から除外することとしましたので、あらかじめご理解のほどよろしくお願いいたします。

4. 絞りこむ

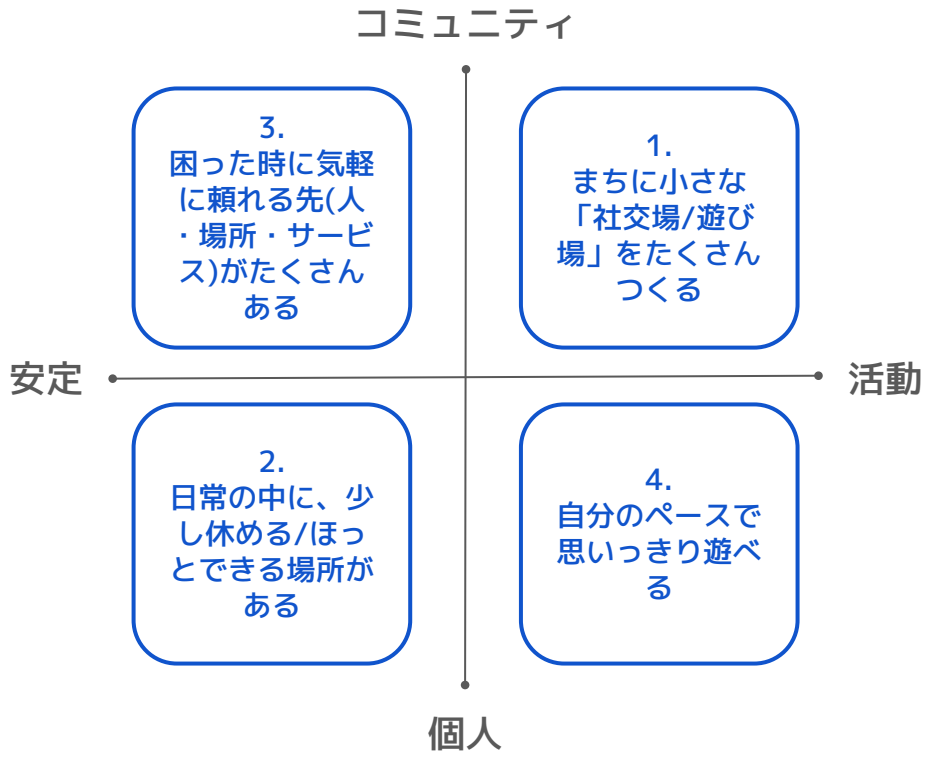
４つのテーマに共通する要素を考慮しながらワークショップ２の限られた時間の中で効果的に検討できる内容とスコープに絞りこみました。

テーマ1-4の関係性に関する考察

1から4のテーマを俯瞰してみると、2つの軸が浮かび上がります。第一の軸は「活動」と「安定」です。まず、1と4のテーマに注目すると、1は他者と適度な距離を保ちつつも積極的に関わり、自己成長を促進する場を求めるテーマです。一方、4は主にこどもたちの意見に基づき、他者に合わせることなく自分のやりたいことに専念したいという願望を反映しています。いずれもアクティブ（活動的）な傾向です。

次に、2と3のテーマに焦点を当てると、2は日々の生活で蓄積される心身の疲れや緊張を癒す場や機会に関するテーマです。3は、個人では解決できない場面において支援を求められる人間関係やサービスの必要性を訴える内容です。1や4に比べると、2と3は比較的心身の安定に関連しているといえるでしょう。

第二の軸は、「個人」と「コミュニティ」です。すでに触れたように、1と3は人との関わりが前提となっており、2と4は比較的個人が主眼となっています。



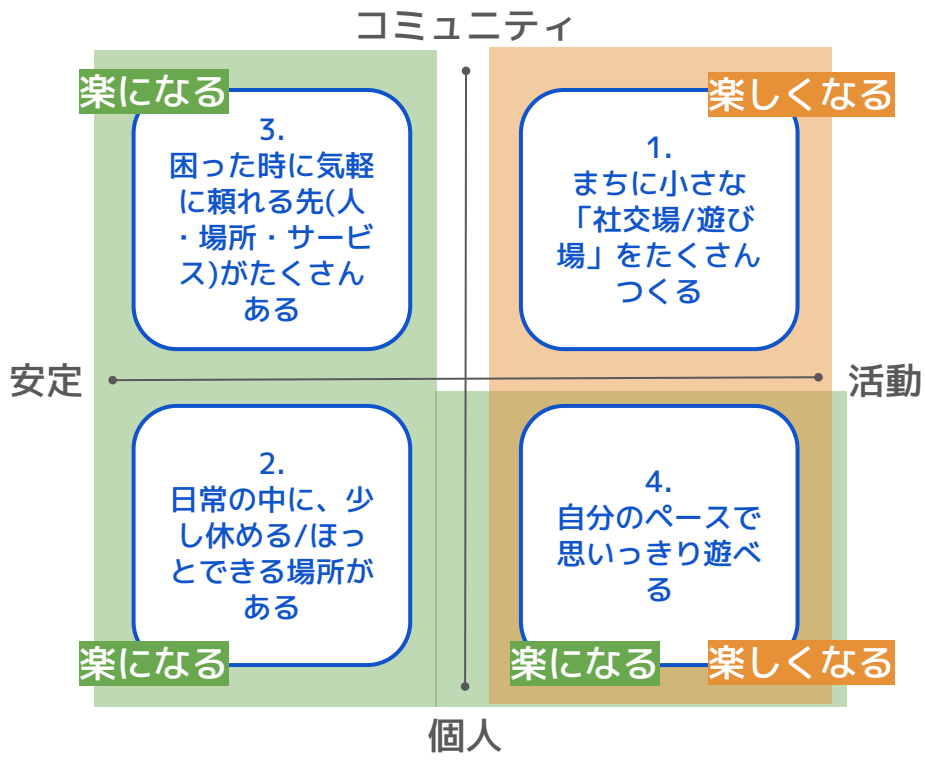
仮に、この2つの軸を四象限で表し、4つのテーマを位置付けると右上の図のようになります。一見すると、4つの象限は対立する要素を持っているようにも見えますが、それぞれのテーマは互いに地続きであり、場合によっては相互に補完し合う関係性にあります。たとえば、1と3について見ると、「社交場」、つまり人々が適度な距離でつながっている場が、有事の際には共助のネットワークとして機能する可能性があります。また、1と4についても、興味や関心が一致する人々（こどもも含む）が出会うことで、より深い学びを得たり、大きなチャレンジを共にする仲間となる可能性があります。このように、4つのテーマは視点を変えれば、**さまざまな場面で自分の気持ちや可能性を大切にするために必要な環境や状態であり、それぞれの「こうしたい」「こうありたい」を実現するための基盤といえます。**こうした基盤に、状況に応じて、それぞれが必要な時にアクセスできること。浮かび上がってきた大きな目標をふまえて、次頁では、ワークショップ２で考察するテーマを、昨年度調査とも紐付けながら抽出します。

4. 絞りこむ

前年度調査の結果との紐付け

昨年度調査では、福祉的な側面が大きい従来型の子育て支援から「子どものいる生活」支援へと再定位した上で、「子育てが楽になり、『子どものいる生活』が楽しくなるための施策とは?」という新たな視点を提示しました。（※詳しくは昨年度最終報告書のpp.37-49をご参照ください）

この視点と、ワークショップ１で得られた意見をまとめた前頁の四象限図を重ねてみると、右図のようになります。テーマ2と3は、程度や手段の差はあれど、こども も大人も個人で対処できる小さな困りごとから、他の人やサービスに頼らないと解決できない大きな困りごとまで、さまざまな場面で「楽になる」ための環境です。一方、テーマ1と4は、「子どものいる生活」を通して、大人もこどももそれぞれが「楽しくなる」＝やりたいことを実現するための手立てとなります。同時に、4に関して補足すると、年齢や立場に関係なく「自分のペースで思いっきり遊ぶ」ことはリフレッシュとなるので、「楽になる」という側面もあります。



また、前年度の調査では「楽になる」と「楽しくなる」は個別の局面として認識され、その関係性について十分に探求できませんでしたが、前頁でも言及したテーマ間に存在する相互補完性を踏まえると、「楽になる」の先に「楽しくなる」があり、かつ「楽しくなる」の先に「楽になる」があるという、表裏一体の関係性がありそうです。

最後に｜ワークショップ２の内容について

以上の考察を踏まえ、ワークショップ２では、**美しが丘公園周辺地域を「大人もこどもも、自分のペースでやりたいことをできる街」にするためには、どんな場や仕掛けがあるとよいかを皆さんで考える機会**としたいと思います。もちろん、個人が「それぞれやりたいことをただやっている」だけではどこかで歪みが生じて、誰かが引き続き我慢することになってしまいます。なので、**ワークショップ２では、まずみんなが我慢している、つまり「やりたいことをできてない状態」を考えるところからスタートして、そこからどうしたらみんなが「やりたいことができる状態」になるかを一緒に考えていきたいと思います。**

まちの政策デザインラボ

分析会２で使用した背景カード

株式会社リ・パブリック

（WS２の）アイデアの背景となる発言

- 2時間でも自分の時間が取れると嬉しい
- こどもがじっとして集中する仕掛けがほしい
- 早朝に一人でできることに限られていた「自分時間」だけじゃなく、大人の友人たちと一緒にスポーツするなど、日中の時間も諦めたくない

キーポイント（発言の解釈）

- （こどもも大人も）一緒にいながら、それぞれ好きなことができている状態
- 大人の友人と日中過ごすことも諦めたくない（社交の時間）
- こどもに目が届くところにいたい（安全面）
- 心身ともに、こどもに全集中しなくていい時間がほしい
- こどもに、何かに熱中する経験をさせたい

WS2で創発されたアイデア

2画面映画館

異なる作品を１つの空間で同時に鑑賞できる。こどもと大人それぞれが見たい作品を楽しめる。

親子でたのしめる犬猫カフェ

親子で好きなものを同時に楽しめる。お休みの日に動物と一緒に過ごせる場所。

広場でのお喋りやスポーツと、こどもの遊びの共存

大人同士でも遊べて、こどもが遊び回っていることも見守っていられる場所。（大人単独で過ごすのではなく、誰かと過ごすことを共存させる）

（WS２の）アイデアの背景となる発言

- 何もない空き地が欲しい
- ごろごろしていたい
- 何もない場所があると、自分たちが好きなように遊べる。
- 一輪車でつかまるところと、コンクリートや板張りのツルツルの地面がほしい

キーポイント（発言の解釈）

- 作られたものや場所、決められたサービスで遊ぶのではなく、自分たちでつくりながら遊びたい
- 大人がきめたルールに縛られたくない
- 大人に干渉されたくない
- こどもには創造性がある
- ○○専用でない、適度な整備の仕方

WS2で創発されたアイデア

空き地

“何かが「ある」場所だけでなく、何にもない、ひろーい場所があったらいい“

（WS２の）アイデアの背景となる発言

- 美しが丘に、こどもが遊べる地区センターがない
- お金がかからないほうがいい
- 自分のこどもだけゲームを持っていないので、友達と遊べない
- 友達とフードコートに行く（WS１）

キーポイント（発言の解釈）

- お金がかからない遊べる場所が欲しい
- お金がこどもの交友関係における分断をうんでいる

WS2で創発されたアイデア

こどもたちが使える地域コイン（商店街の協賛）

こども専用の地域通貨でお小遣いの範囲、ごく少額のお金を使う機会をもてること（考察より抜粋）

地域のこどもが参加できる縁日

こどもが縁日の仕掛け側に回る

遊びから食事まで済ませられ、長い時間いられる場所（お金がかからない）

“広大な広場があって、家族がそれぞれ好きに過ごせる場所があったらすごくいい。キッチンカーとかがきて、ご飯も済ませられるといい。”

天候に左右されない遊び場

保護者からもこどもからも要望あり

無料であそべるゲーム屋

ゲームやお金を持っているかに関係なく（友達と）遊べる

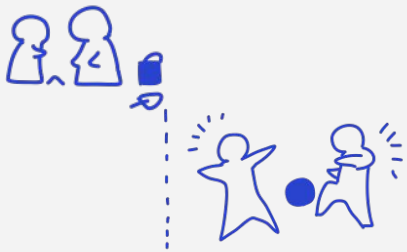
（WS２の）アイデアの背景となる発言

- 小さい子に気を遣う
- 大きい子がこわい
- 友だちのしたいことに合わせている
- ママ友との時間が、実は気を遣うときもある　（こどもが小さい時は必要な関係性だが…）

キーポイント（発言の解釈）

- 他の人に気を遣わずに自分のペースであそびたい／行動したい
- 気を遣わなくてもいいくらい、気軽な親同士の関係性が持てる機会があるといい

WS2で創発されたアイデア



小さいこと大きい子があそぶゾーンを分ける

公園で小さいこどもに気を使わなくてもいいようゾーニングができるといい。小さいこどもと大きいこどもがそれぞれ安心して遊べる場所をつくることに加え、親子で一緒に遊べる共同スペースもあるといい

楽器や運動など、いろんな遊び方ができる場所

卓球やバスケ、楽器など色々な道具が用意されている施設。雨が降っていても遊べる。（保護者からもこどもからも要望あり）

（WS２の）アイデアの背景となる発言

- 大人に見られたくない
- 大人立ち入り禁止

キーポイント（発言の解釈）

- わくわくするこどもだけの秘密の場所、大人が入らないこどもだけの聖域がほしい
- （大人がそれを許すには）　安全性の確保が必要
- 大人の価値観で制限されたくない

WS2で創発されたアイデア

こどもだけがいける無料のゲーム屋

“家の前に、無料ゲームやがある。無料のゲームがある。射的とか、コインのゲームとか。大人立ち入り禁止”

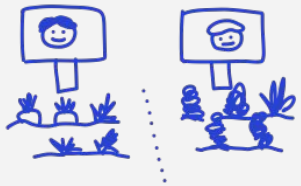
（WS２の）アイデアの背景となる発言

- 自然と触れ合うのが気持ちいい
- ごろごろしたい
- 遠くまで車で行くと、お酒が飲めない
- タガメをとりたい
- 地面に座りたいのに座れない（雑草が茂っていたり、泥だったり）

キーポイント（発言の解釈）

- 気軽に、近場で、緑や自然と触れ合いたい
- 分刻みの日常から離れてゆっくりしたい

WS2で創発されたアイデア



シェア畑

住んでいるところから自転車でいけるくらいの距離にある畑。

タガメのいる池

たがめをとりたい、ボートがあるとよい。

（WS２の）アイデアの背景となる発言

- こどもが小さい頃人に預けることができなかった
- 偶然近所の人と出会ってこどもと遊んで欲しい
- 習い事送迎タクシーは心配で使えない
- こどもが小さいうちは、気の置けない仲間が必要
- 前もって約束せずに預けたりしたい
- 預けられるようになるまでのプロセスが長い
- 前もって予約しても、家族の都合で当日つかえないことがある
- 急に知らない人に預けられるのは嫌
- 下の子が上の子の習い事に振り回されていた。公園に連れていく回数が上と下では確実に違った。

キーポイント（発言の解釈）

- 信頼ができる（こどものケアをサポートしてくれる）人と出会いたい
- 手続きが複雑だったり面倒だったりするサービスは使いたくない

WS2で創発されたアイデア

大学のキャンパス開放デーでの出会い

地域内の広い場所で、大人もこどもも自由に遊べる空間

人を選べる子サポ

顔写真や経歴、得意なことが見られて人を選べる子サポ。そして人気ある人は時給を上げるとかできる

コミュニティ型の預かり合い

個人同士ではなく、集団ベースでの預かり合い（クラブや部活のように）

（WS２の）アイデアの背景となる発言

- 静謐な場所がほしい
- 図書館がほしい
- 一人で行ける定食屋がなくなった。この辺りは、複数人でオシャレしていく場所ばかり。
- 仕事が終わり、こどもたちの相手をする前に一杯だけ飲むのが楽しみ

キーポイント（発言の解釈）

- 一人で気軽に、静かにすごす場所と時間がほしい（街には一人で過ごせる場所がない）

WS2で創発されたアイデア

ギャラリーやブックカフェなどの、静かな時間を楽しめる場所

社交的な場所ではなくて、一人で静かに過ごすことができるような場所。例えば、有隣堂書店のカフェなど

大人が一人で行けるバーやレストラン

おしゃれして複数人で行く場所ではなくて、駅前のSega Fredoのように仕事終わりに、一杯だけ飲んで帰れるような場所。

（WS２の）アイデアの背景となる発言

- ゾンビやおばけにあいたい
- 夏祭りがたのしい（WS1）
- 火を使いたい
- 色を混ぜたい／カラフルな砂場
- 池であそびたい
- 宝探し
- タガメをとりたい

キーポイント（発言の解釈）

- 日常のなかでわくわくする／スリルがあるようなまちであって欲しい
- 未知の存在（お化け、タガメ、宝）に出会いたい
- Playful city

WS2で創発されたアイデア

100メートルの滑り台

長いぐるぐるの滑り台

カラフルな砂のある砂場

色々な色がある砂場（ほかにも、宝探しができるすなばなどのアイデアも）

巨大迷路

巨大な迷路

ポップアップのマルシェや花屋さん（WS１）

道端に花屋やマルシェが現れると、街の人といつもと違うコミュニケーションができる

アイデアの背景にある考えや思い

- 一緒に遊べる場も欲しい
- ゾーニングあったほうがいいけど、みんなでいられる場所も欲しい
- 誰でも使いやすいトイレがいい
- いろんな種類のブランコが集まっていてほしい
- 自転車をちゃんととめたい
- タバコがくさい

キーポイント（発言の解釈）

- 安全を担保しながら、多様な人が一緒にいられる場がほしい
- 誰かを排除したいわけではなく、誰もが居心地良く過ごせる場所をつくりたい
- 禁煙にしてほしいわけではなく、煙が気にならないようにしてほしい

WS2で創発されたアイデア

親子が一緒に遊べる共同スペース

小さい子・大きい子が一緒に遊べるスペースに加えて親子で一緒に遊べる共同スペースもあるといい

小さい子、大きい子が楽しく遊べる場所

身体のサイズが違う子小さい子だけのスペース、大きい子スペース、兄弟や親と一緒に、みんなで遊ぶスペース

公園内に喫煙所

公園でたばこを吸いたい人のため、一人しか入らない部屋でおちつける？

みんなが使いやすいトイレの整備

理想のトイレは、体に障がいのある人や、目が不自由な人もわかりやすい。くさくない。